杉井 光
イラスト✻岸田メル
神様のメモ帳9
電撃文庫

308

NEET探偵事務所

It's the only NEET thing to do.

神様のメモ帳9

杉井 光

イラスト✻岸田メル

Characters

ミンさん

ニート探偵事務所があるビルの1階に店を構えるラーメンはなまる店主。アリスはじめニート探偵団の面々を生温かい目で見守っている。

篠崎彩夏

ナルミのクラスメイト。とある事件で重傷を負い、記憶を失ったものの生還を果たす。明るく素直な性格だが、どこかずれてるところも。

平坂組 Hirasaka-gumi

いまどき任侠を気取る不良少年グループ。しかしその実力は侮れない。

四代目

平坂組リーダー。冷徹な性格だが、趣味特技が手芸という隠れた一面も。ナルミと義兄弟の杯を交わしている。

電柱

平坂組、四代目麾下のツートップその1。組の中では縦幅最大。

岩男

平坂組、四代目麾下のツートップその2。組の中では横幅最大。

アリス Alice

ひきこもりの自称《ニート探偵》。PCとぬいぐるみで溢れた自室で、ネットを駆使して真実を暴きだす。普段はいつもパジャマを着て、栄養の大半をドクターペッパーから摂取している。

藤島鳴海 Narumi

本作の主人公。転校を繰り返し人付き合いを避けるようになっていたが、とある事件をきっかけにアリスの助手となる。なにごとにもやる気がなさげなニート予備軍だが、口八丁だけは一人前。

ニート探偵団 NEET Detectives

アリスのもとで合法・非合法を問わず捜索活動をするニートな野郎ども。

テツ先輩

元ボクサーで荒事にたけた武闘派。その一方、パチスロや競馬などに精を出すギャンブル狂。

ヒロさん

女のもとを渡り歩くヒモ。卓越した話術でたくみに情報を引き出す（ただし対女子限定）。

少佐

童顔で小学生にも見えかねない外見をしているが、盗聴・盗撮・爆発物のエキスパート。

Designed by Toru Suzuki

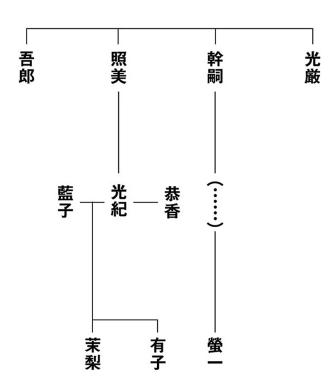
NEET ニート探偵 アリス ALICE
DETECTIVE

「今なら、ぼくはおそらく死んでもいい」
「ぼくの生涯の仕事はすべてやり終えている」
「わたしの仕事も」
「でも、それはつまり、そろそろ生きだす時だって意味じゃないかしら」

『死者の代弁者』オーソン・スコット・カード／塚本淳二訳

紫苑寺家　家系図

1

母が死んだ日のことは、今でも克明（こくめい）に憶（おぼ）えている。

姉からの電話の一言一句（いちごんいっく）も、父が涎（よだれ）のこびりついた口を半開きにしていたことも、病院の真っ白（まっしろ）な壁に書かれた案内表示（ひょうじ）も、細部まではっきりと思い出せる。なにもかもがあまりにも鮮明（せんめい）なので、映画かなにかで見た場面と混同（こんどう）しているんじゃないかと疑うこともある。でも、時間を遡（さかのぼ）ってたどってみれば、その日の朝に玄関先（げんかんさき）で見送った母の最後の顔に結びつく。間違いない。僕自身の記憶（きおく）だ。

なぜいつまでも色褪（いろあ）せないのだろう、と思う。

おそらく、僕が死体をこの目で見ていないのが原因だろう。足りない現実感を埋め合わせるために、僕の脳味噌（のうみそ）が無駄（むだ）ながんばりをみせて、どうでもいいことまで手当たり次第（しだい）に詰め込んだのだ。僕は当時まだ小学生だったし、母の身体（からだ）は突っ込んできたトレーラーとビルの壁との間で潰（つぶ）されてほとんど原形（げんけい）を留（とど）めていなかったというから、父が僕を死体安置所（あんちじょ）に入れようとしなかったのは当然だった。

しかしその父にしたところで、病棟（びょうとう）の地下への階段前で立ち尽くしてまったく動かなくなってしまった。けっきょく身元確認（みもとかくにん）をしたのは姉だった。当時まだ高校生だった姉が、警察や医者（いしゃ）とあれこれ話し合い、葬儀社（そうぎしゃ）の手配までひとりで済ませた。

2

「いやもうほんと、真っ昼間なのに夜空に星が見えるんじゃないかって思っちゃったくらいの美人なんだよ！」

ヒロさんは『はなまる』勝手口前で少佐とテツ先輩を相手によくわからない比喩を使って熱弁していた。どうやら昨日の茉梨さんのことらしい。

「彩夏ちゃんからメールもらって速攻来てほんとよかった、ちょうど帰ろうとしてるところにばったり逢ってさ」

「そんなにアリスに似ているんですか？」と少佐も興味深げ。彼だけは茉梨さんを実際に目撃していないのだ。

「そっくりだよ。俺もヒロと一緒にいたからちらっと見たけど、アリスがそのままおとなになった感じ」とテツ先輩が言う。「俺らと同い年くらいかな、あれ」

テツ先輩やヒロさんは二十歳か二十一歳だったか。でもヒロさんは首を振る。

「二十六歳だよ、たしか」

「あれで？　へえ、女子大生くらいに見えたけど。ていうかヒロ、なんで歳知ってんの？」

「ファッションモデルなんだよ、あの人。マリィ・ショーンていう名義で、日本じゃあんまり知られてないけど海外じゃけっこう有名なんだ。自分でブランド持ってる」

　さすがヒロさん、そっち方面には詳しい。

「でも、おれもマリィ・ショーンは写真で何度か見たことあるけど、アリスのお姉さんだなんて全然気づかなかったなあ」

　ヒロさんは何冊かの女性向けファッション誌を見せてくれた。茉梨さんの『ファッションモデルとしての顔』は、たぶん表情をつくっているせいだろう、あまりアリスの面差しを感じさせない。おまけにどれも外国の雑誌なので紫苑寺という文字はどこにも出ていない。アリスに姉がいるという前提知識もなかっただろうから、気づかなかったのも無理はない。

　一冊だけ日本の雑誌があったのでテツ先輩が手に取って開く。一冊まるまるマリィ・ショーン特集のムックだ。インタビュー記事のプロフィールを見ると、なるほど二十六歳だ。

「『自分で身につけて納得したものしか売りたくない、それがマリィのプライド』だってよ。それでモデルは全部自分でやってんのか」

「そんなこと言ってたら水着とか期待するだろ？　でも水着だけはモデルやらないんだよ、ほら今年の夏の新作すごいのいっぱいあるのに！」ヒロさんは興奮気味にページをめくってみせる。色とりどりのビキニ

姿で微笑むモデルたちはみんな白人女性ばかりで、茉梨さんの写真はない。ていうか水着ってこんな春先から新作発表すんのか。流行り廃りの激しいファッション業界は三ヶ月くらい季節を先取りしておかないとやっていけないのかな。

「マリィ・ショーンが好きな女の子に訊いてみたんだけど、昔から水着モデルだけは絶対に自分でやらないんだってさ」

「あれだろ、売れてくると水着は卒業すンだろ」

「グラビアアイドルと一緒にするなよ。ああ、なんでだろうなあ。口説くしかないかな、そしたら海とかプールでおれだけに見せてくれるだろうし」

　おい、アリスの姉だぞ？　口説くの？　いいの？

「さすがヒロさんセレブ好きですな！」と少佐が下世話なことを言い出す。「これだけの規模のファッションブランドを経営していてモデルも自分でやっているとなるとさぞかしセレブでしょう。しかも藤島中将が連れ込まれたのは青山の億ションだとか」

「連れ込まれたって言わないでください」誤解を招くだろ。

「車もいいの乗ってたなあ、あの人」

　ヒロさんはうっとりした目になって言う。

「DB9のヴォランテ、いっぺん乗ってみたかったんだよね。でもデートに誘っておいて『きみの車を運転させてくれ』って言うのもどうにも難しいしな……ああ、結婚すればおれも乗り放題だな、そうするとアリス

がおれを義兄様って呼ぶのか、なんか変な気分だな」
　ちょっとちょっとヒロさん？　聞いてるこっちも変な気分ですよ？
「へえ、ヒロ、おまえ車に乗りたいってだけでプロポーズするのか」とミンさんが訊ねた。
「そんなことないよ、車にも女にも乗りた――ってミンさんっ!?」
　いつの間にか勝手口が開いていたのである。ミンさんはできあがったラーメンを木台に置くなり、ヒロさんに往復びんたをくれて憤然と厨房に戻っていった。
「あちちちち……」
　地べたにぶっ倒れたヒロさんは頬をさすりながら起き上がる。ほんと懲りない人だ。
　テツ先輩はヒロさんをさらりと無視して僕に訊いてくる。
「で、アリスの姉貴はなんの用だったん？」
「え？　知らないですよ、そんなの。身内同士の話だし」
　僕はぎこちなくごまかす。
「藤島中将の素行調査でしょう。可愛い妹の助手が婚姻届を秒間六十連射するような結婚詐欺師だと知ったら不安にもなります」「あれはあんたが作ったマシンだろうが！」
「アリスを連れ戻しにきたんじゃねえの？」
　テツ先輩のなにげない訊き方に、僕は身を固くする。当たらずとも遠からず――だ。

「それならアリスが事務所に入れたりしないでしょう」
「そりゃそうか。じゃあ金借りにきたんじゃねえの？」
「高級外車転がしてて自分のファッションブランドまで持ってるセレブがですか？」
「テツの基準で考えるなよ」
「馬鹿、俺なら借りるなんてせこいことはしねえよ。どうせ返せねえんだから、最初っから金くれって頼む」
なんで自慢げなの？
　あいかわらずの軽口大会を続けている三人に、ふと訊いてみた。
「あの、もしアリスがほんとに連れ戻されちゃったらどうします？」
　テツ先輩も少佐もヒロさんも、訝しげに僕を見た。
「どうもしねえけど」
「靖国で逢おう、だな」
「お姉さん以外にも親類の若い女がいたら紹介してもらう、かな」
　訊いた僕が馬鹿だった気がする。でもテツ先輩はすぐにこう続けた。
「しかしまあ、あいつがいなくなるとこの街もつまんなくなるだろうな」
　みんなそろって、背後の非常階段を見上げる。

「調査業務の依頼も来なくなりますからね。自分の脱法的技術力も使いどころを失ってしまうな」と少佐もやや声を落として言う。

「でもアリスがいなくなるってなんか想像できないね」

ヒロさんが淡い笑みを浮かべてつぶやく。

僕も想像できなかった。この『はなまる』に通うようになって、たった一年と半分。もうずっと昔からここで暮らしていたような気がしてくる。たくさんのものを失った。多くの人々が通り過ぎていった。近しい人さえも、ひととき僕らの輪から離れていってしまったことがたびたびあった。けれどアリスだけは変わらずここにいた。冷え切ったベッドの上にずっと座って、小さな身体に知識と知性をいっぱいにみなぎらせ、世界を検索して真実を探していた。僕もすでに、アリスのいない生活というものを思い浮かべられない。

「もしあの姉貴がほんとに連れ戻しにきたんだとしても、決めるのはアリスだからな」

テツ先輩はぽつりと言った。

少佐もヒロさんもうなずく。

そう、アリスはずっとここにいると決めているのだ。

大伯父さんが倒れたと茉梨さんは言っていた。逢いたがっている、と。それからたしか、お父さんと同じ病院に入院した——とも言っていた気がする。つまり父親はもっと前から入院していたということか。

でも、それがどうした？　アリスには紫苑寺家とこれ以上関わる理由も意志もないんだ。どうだっていいことじゃないか。

僕は自分の胸に手のひらをそっとあてる。茉梨さんに出逢ったときから少しずつ胸の内側で育ってきている、この言いようのない不安はいったいなんだろう。

ポケットで携帯電話が震えた。

『下まで来ているならさっさと事務所に顔を出したまえよ』

アリスが電話口で不機嫌そうに言う。

『昨日もさっさと帰ってしまって、大事なところを訊けなかったじゃないか。今日こそは、姉様といったいどういうつながりがあってどういう話をされたのか、微に入り細を穿ち説明してもらうよ』

僕は嘆息して立ち上がった。

その日はアリスにさんざん詰問されて茉梨さんとの会話を一言一句漏らさずに再現するという罰ゲームを受け、だいぶ遅い時間にへとへとになって帰宅した。姉はすでに風呂を済ませてパジャマ姿でビールを飲んでいて、居間に入ってきた僕を見て部屋の隅を指さした。

「あんたにものすごい大荷物が届いてるよ」

リボンをかけられた平たい大きな紙箱が四つも積み重ねられている。なんだこれは。送り状にはたしかに僕の名前がある。開いてみると、上等そうなスーツやシャツやネクタイや靴が出てきて、姉と顔を見合わせてしまう。

薄緑色の小洒落た封筒にメッセージカードが入っていた。

『プレタポルテでごめんなさい。今度いっしょにテイラーに採寸しにいきましょう』

茉梨さんからだった。姉が寄ってきて僕の隣にしゃがみ込み、箱から服を取り出しては矯めつ眇めつして盛大に感嘆している。

「……プレタポルテってなに？」

ファッション用語なのかな、と姉に訊いてみる。

「既製品の服のこと。でもこれ既製品っつっても何十万ってすると思うんだけど」

僕は天井を仰いだ。オーダーメイドじゃなくてごめんなさいって書いてあるわけか。そんなことで謝られるなんて普通に生きていたらまず体験しないだろう。

「鳴海、これなに？　だれにもらったの？　ちょっと着てみようよ、あんたこんなの着たことないでしょ」

興味津々の姉を黙らせるには、どうやら茉梨さんのことを正直に話すかスーツを実際に着てみるかどちらかをしなければならないようだった。僕はしかたなく後者を選んだ。

「……へえ……」と姉は息を漏らす。

　陽が沈んですぐの夕空みたいな複雑な色合いのスーツは、信じられないくらい僕にフィットしたようで、姉も驚いた顔で二歩ほど退がって僕の全身をなめるように見た。

「大笑いしてやるつもりだったけど、意外にイケてるね」

「選んだ人がファッションデザイナーだからね」

「ふうん？　そんな知り合いいたんだ、だれ？」

　あ、しまった。茉梨さんの話をしないで済むようにと試着してみせたのに意味がなくなってしまった。僕は「じゃあ皺になるといけないから」と言い訳してさっさと自分の部屋に引っ込み、普段着に戻った。スーツはほんとうに息が詰まる。

　それにしても、こんな贈り物をしてくるなんて。次に逢ったときにどうお礼を言っていいのやら。お返しとかしないとだめだろうか？　青山の超高級マンションの最上階に住んでいるモデル兼デザイナーの女性に僕がいったいなにを贈ればいいんだ？

　まあいいや。また逢うかどうかもわからないんだし。

　部屋を出て一階に下りたとき、玄関の外の照明が自動点灯して、ドアが開いた。僕は階段のいちばん下の段に後ろ足を置いたまま身をこわばらせた。入ってきたスーツ姿は記憶にあるよりも二回りくらい縮んでいるような気がした。父を見るのは何ヶ月ぶりだろう。痩せこけた羊を思わせる丸くなった背は見

ているだけでみじめな気分になってくる。革靴を脱いで廊下に上がってくるときに彼の視線は僕の胸のあたりを通過した。

一瞬、目が合う。

僕はうつむいて自分の爪先を見る。

父の足音は廊下を遠ざかる。ドアの開閉音と、そこに挟まる姉の声。

「あれ、お父さん。ご飯食べてきた？　今からでも作る？」

父はほとんど聴き取れないほどの声でなにか言った。僕は廊下の床に粘りついた足を引きはがすと、踵を返して階段をまた上り始める。

実はあの人は病気でもなんでもないのではないか、と時々思う。母が死んだ直後はたしかに少し精神的にやられていたのかもしれない。でもその後、姉との間の会話もどんどん減っていったし、家にほとんど寄りつかないようになった。会社のそばにウィークリーマンションを借りるという無駄なことをしているらしかった。それはつまり、姉や僕とあまり顔を合わせたくないという意思表示であり、裏返せば現状を正しく認識しているということでもある。僕という人間が存在していることがわかっていなければ、僕という人間を『無視』はできない。なんとも不気味な話だけれど、あの頃よりはましになっているのではないか。

だからといって、僕がなにかするわけでもない。

早く家を出たいな、と思う。自分で食えるようになって、さっさと独り立ちしたい。大学に行ってまで勉強したいことがとくにあるわけでなし。そう考えると、四代目の誘いを断ってしまったのを少し後悔している自分に気づいて、心底情けなくなった。

✽

茉梨さんのメッセージカードは社交辞令ではなかったらしく、二日後には呼び出されて一緒に仕立屋に行った。電話でもあの押しの強さは変わらずで断り切れなかったのだ。全身採寸されるなんてはじめての経験だった。茉梨さんと店の人がまったく理解できない専門用語を連発しながら打ち合わせしている間、僕は首をすくめて店内を見回していた。重厚な造りの棚にはぎっしりと生地が並び、懐かしいにおいがした。

「できあがるのは一ヶ月後だって。楽しみにしてて」

店を出しなに茉梨さんは言う。

「あのう、こないだ送ってもらった服もすごく高いものだったみたいですし、こんなことまでしてもらうと、どうお返ししていいのか……」

「ん？　鳴海くんのためにしてるわけじゃないよ。わたしのそばにいる人には、それなりのかっこうをしていてほしいだけ」

「はあ」

野良猫に思わず餌をやってしまうのと同じだろうか。

「それに、ちゃんとしたテイラーに行くためにはある程度の服が必要でしょ」

僕は驚いて、店の入り口を振り向いてしまう。今のはちゃんとしていないところなのか。なるほど、それでこないだひとまずこの既製服を送ってきてくれたのか、と僕は自分の着ているスーツを見下ろす。そして今の店で仕立てた服を着て、もっとランクの高い店に頼みにいくわけか。なんのゲームだ。

「ところで鳴海くんの部屋のウォークイン・クローゼットはどれくらいの広さ?」

「なんでウォークインがある前提なんですか」庶民の家には普通ないっての。

「えっ……あ、ああ、そう、なの?」

育ちが良い人ってやっぱり世間ずれしてるんだなあ、と思う。アリスにはそういう面でずれたところはないから、なんだか新鮮だった。

「パリに家を建てるときは、鳴海くんの部屋のクローゼットは大きめにしないとね。男の人はすぐ他の荷物でいっぱいにしちゃうんだから」

「いや、あの、……ええ?」

唖然とする僕を放置して茉梨さんは銀座通りを日本橋の方へと歩き出す。僕はあわてて追いかけ、中華レストランの入り口で追いつく。にこやかな女性店員が僕らを出迎え、個室に案内してくれる。

丸テーブルに向かい合って座り、豪奢な店内のインテリアに僕がまごまごしている間に茉梨さんは注文を終えてしまう。ウェイトレスが出ていってしまった後でようやく僕は言った。

「あのっ、な、なんですかさっきの話は？　僕の部屋？」

「だって、有子とかわたしと同じ部屋ってわけにはいかないでしょ？」

「い、いや、そういう意味じゃなくてっ、なんで僕もいっしょに住むなんて話になってるんですか」

いきなり茉梨さんがしゅんとした顔になるので僕は焦る。

「鳴海くんは有子の相棒だよね」

「え、ええ、まあ」

「有子とずっといっしょだったんだよね」

「ずっと……ううん……そう表現しても間違いでは……」

「だから鳴海くんを連れていけば有子もついてくるよね？」

どういう考え方だよ。んなわけねーだろ。

「鳴海くんなら押しに弱そうだし服とか食事とかたくさん奢れば断らないかなって」

「押しに弱いのは自覚してますけど黙っててくださいよそういうのは！」

「あ、ごめんごめん」と茉梨さんは笑う。「だからって今から出てったり、買ってあげた服を突っ返したりしないでね？　レディに恥をかかせちゃだめだよ？」

レディはそういう変な策謀しません。しかし言う通りではあったので、椅子から腰を浮かせていた僕はしぶしぶ座り直す。
「でも、わたしはほんとうに有子といっしょに暮らしたいの。それはわかってくれる？」
「それはもう重々わかりましたけど、あのですね、なんか誤解してますよ。僕をどうこうしたからってアリスが考えを変えるようなことはないですよ？　僕あいつに対して影響力なんてないですからね、雇われの身なんだし」
「三人で暮らすの素敵じゃない？　想像してみて」
　僕の訴えを完全無視して茉梨さんは夢見がちな熱っぽい目で言う。
「朝、わたしと有子がベッドで目を醒まして、起きようかな、二度寝しようかな、って迷っていると、鳴海くんがクロワッサンとカフェオレを持ってきてくれるの。わたしが身支度を済ませて有子の髪を梳いてあげてると、家じゅうの掃除を終えた鳴海くんがぴかぴかに磨き上げた靴を持って迎えにきてくれるの。わたしと有子は鳴海くんの牽く人力車でシャンゼリゼ通りを散策するの。素敵じゃない？」
「素敵じゃねえよ」僕、ただの奴隷じゃないか。
「有子のために子供服のブランドも一新しようかと思ってるの」
　茉梨さんはふわふわした声で言う。

「今のうちの子供服、ちょっと弱いから。ブランド名も『アリス・ショーン』に変えようかと思ってる。鳴海くんたちが有子のことアリスって呼んでるの、ちょっといいよね」
「はあ」もはや妹思いとかそういう次元ではない。しかしアリスにはあの通り鬱陶しがられているわけで、ちょっと気の毒にもなってくる。
「もちろんモデルはみんな有子にやってもらう。そしたらほら、いっしょに暮らす理由にもなるでしょ。いいアイディアだと思わない？」
「アリスがカメラの前に出るわけないと思いますけど」
「二人で仕事して、帰ってくると鳴海くんがご飯作って待っててくれて……」
　だからひとを勝手に家事手伝いに決めないでくれませんかね。
「そういうのにずっと憧れてたの。家族がいる生活」
　僕は口をつぐんで、茉梨さんの顔をじっとうかがった。彼女の中の柔らかい部分に踏み込んでしまった、そんな感触があった。
「有子はわたしが守ってあげたい。ほんとの家族として。あの人たちにはもう指一本触れさせたくないの」
　事務所にやってきたときの茉梨さんの言葉を思い出す。
「……紫苑寺の人たちがこれからアリスに群がってくる、って言ってましたよね。あれはどういう意味なんですか？」

「ものすごく下世話でそのままの意味。わたしと有子は、紫苑寺の財産をいくらか相続できる立場なの。ただ、一族の中にはそれを認められないって人もいる。利用しようって人もいる。お祖父様が亡くなれば、そういうのが一気に噴き出してくるわけ」

僕は苦い味のする唾を飲み下す。予想以上に生臭い話になってきた。

「ああ、ごめん」と茉梨さんは淡く笑う。「この先はあんまり食事が楽しくなるような話じゃないから、やめておくね」

それから彼女ははじめてグラスのワインを一口飲んだ。

「べつにいいですよ」と僕は言った。「むしろ知りたいです」

茉梨さんの視線が僕の顔を探る。こんな素っ気ない言い方じゃ伝わらないよな、と僕は思い直して付け加える。

「もう僕も無関係って言ってられなくなるわけですよね。それなら、話せるだけ話してください。アリスのことも、茉梨さんのことも」

それから、紫苑寺家のことも。

茉梨さんは小さくうなずいた。たぶんうなずいたのだと思うけれど、それから冷菜三点盛りが運ばれてくるまでずっと沈黙が続いたので僕は少し不安になる。

「有子は、どれくらい話したの?」

ウェイトレスが出ていってしまった後で、茉梨さんはぽつりと言った。
「お母さんが愛人さんだった、ってことくらいです」
「そうか」茉梨さんは困った笑いを見せる。「食べてて。その方が話しやすいから」
たしかにむっつり向かい合ったままじゃ話しづらいだろう、と僕は冷菜に箸を伸ばす。たぶん普通の状態で食べたらものすごく美味しいのだろうとは思うが、そのときはまるで味がしなかった。
「母は、『銀座の女』だったの」
茉梨さんは冷菜の角皿をじっと見つめながら語り始める。
「クラブのホステス。父は常連客。奥さんとあんまりうまくいってなくて、身体の関係になって、子供もできちゃって、っていうよくある話。その子供っていうのがわたしのことなんだけどね」
再び沈黙があった。ひょっとしてなにか質問を挟んだ方が話しやすいのだろうか、と思って口を開く。
「茉梨さんは、お母さんと二人で暮らしてたってことですか」
「そう、最初はね」と茉梨さんはうなずく。少しほっとした顔になったところを見ると、質問してほしかったのだろう。「父が買ってくれた赤坂のマンションで二人暮らし。とはいっても母は子育てなんてする人じゃなかったから、わたしの世話は家政婦さん任せ。夜はお店に出ちゃってたからわたしはいつもひとりだったな」
「茉梨さんは、お父さんには……逢ってたんですか？」

「月の最後の金曜日に、必ず我が家に来てた。ものすごく可愛がってくれて……毎月ほんとに待ち遠しかったな。母は頭空っぽの人だったから、あれが茉梨のお父さんなんだよって正直に教えてくれたの。わたしが父様って呼ぶのも咎めなかったし」

　茉梨さんは馬鹿にした笑いを漏らす。

「ほんとにデリカシーのない人だった。自分が良くないことしてるって自覚もなかったんじゃないかな。紫苑寺の御曹司の愛人だってこと、美容師とかブティックの店員とかに平気で話してたから。正直、父様がどうしてあんな女を選んだのかわからない」

　呼び方がいつの間にか『父』から『父様』に変わっていた。少しずつ感情が溶け出しているのだろうか。

「逃避できる相手ならだれでもよかったのかな。奥様はきつい人だし、うまくいってなかったみたいだし、お祖父様から子供早く作れってせっつかれてたらしいし」

「それは、ええと、後継者を、ってことですか」

「そういうこと」と茉梨さんはくたびれた笑みをつくる。「お祖父様がほんとのお祖父様じゃないのは有子に聞いてる？」

「ええと、大伯父さんなんですよね？」

「そう。わたしの祖母の兄。それで話がややこしくなるわけなんだけど」

それから茉梨さんは紫苑寺家の現在の一族についてかいつまんで説明してくれた。聞いてみるとほんとうにややこしい話だった。
現当主の紫苑寺光厳は四人兄弟の長兄で、幹嗣、照美、吾郎という三人の弟妹がいた。吾郎というのはもちろんヒロさんの師匠であるあの吾郎先生だ。
光厳は妻を早くに亡くして子供がおらず、妹の照美は一人息子の光紀を遺してやはり早世していたため、光厳は光紀を実の息子のように可愛がった。一方、次男の幹嗣は健在で、系列グループ企業の重要ポストに次々と子供たちを就かせて一族の中心的な存在となっていた。
弟・幹嗣の台頭を警戒していた光厳は、幹嗣の長女を光紀に娶せようとした。いとこどうしの縁談である。これが成立すれば、幹嗣の子たちは全員が光紀の弟妹ということになり、光紀が紫苑寺の嫡男であるという図式がいっそうはっきりする――と考えたらしいのだ。
「ちょっと意味わかりませんけど」嫡男って。
「そういう家なの。気持ち悪いくらい血のつながりにこだわるの」
「今どきまだあるんですね、そんな戦国時代みたいな……」
「笑っちゃうでしょ。父様もばかばかしいっていつも言ってた。だから、いやがって外で結婚相手を見つけてきちゃったわけ。良家のお嬢様だったからお祖父様もむげにはできなかったみたい」

「ええと……つまり、従妹とくっつけられるのを回避するために他の人とさっさと結婚しちゃったってことですか」

「そう。そんな結婚生活、うまくいくはずないよね」と茉梨さんは苦笑した。「とにかく父様はお祖父様から逃げたかったみたい。養子縁組の話も当然あったんだけど、なんのかんのと理由をつけて先延ばしにし続けたの。まだ仕事の上でも未熟者だから、とか……。それが結果的に、もっと話を面倒くさくしちゃったんだけど」

「どうしてですか?」

「養子になってれば、光厳お祖父様の遺産の相続人は父様ひとり。でも養子になっていないから弟の幹嗣おじさまにも相続権が発生するの」

「ああ……」

　知らなかった。そういうものなのか。それは——でかい火種だ。

「紫苑寺を嗣ぐのがいやなら、吾郎おじさまみたいにほんとうに逃げちゃえばよかったのに、って思う。父様はけっこう吾郎おじさまと仲が良くて、遊びも色々と教えてもらってて。たしか母と知り合ったのも吾郎おじさまに連れてってもらったクラブだって言ってた」

　吾郎先生が家を逃げ出せたのは、本人の性分もあるだろうが、末っ子で家を嗣がなくてもいいという気楽な立場だったことも大きいのではないだろうか、と思う。

「だからね、吾郎おじさまを見習って本物の放蕩者になっちゃえばよかったのに、けっきょくなにもかも中途半端。父様は真面目すぎたのかもしれない。どうして奥様とは子供を作らなかったのって訊いたら、作ったら家を嗣がなきゃいけないから、だって。笑っちゃうよね。そのくせ愛人とはしっかり子供作ってて」

　その子供というのが当の茉梨さんじゃないか。えぐい話になってきたので僕は苦笑して、口を挟んで空気を和らげようとする。

「お父さんとは、仲が良かったんですね。そんなぶっちゃけた話までしてたってことは」

　茉梨さんはくすぐったそうに笑った。

「……そうだね。そのうち父様は、母が仕事とかで留守にしてるときにも家に来てくれるようになったから。わたしに逢いにきてくれてたってことかな。わたしがご飯つくってあげられたらよかったんだけどね、家事はからっきしだったから、いつも外食。この店も父様に連れてきてもらったの」

　スープが運ばれてきた。茉梨さんはようやくスプーンを取り上げて一口飲んだ。

「他にもあちこち連れてってもらった。映画館とかディズニーランドとか。家族サービスごっこ。それから父様の海外出張にもこっそりついていったりね」

「え？　それ、叱られませんでしたか？」

「全然大丈夫。職場まで押しかけたわけじゃないし。父様が仕事してる昼間は、ホテルのまわりを散歩したり画廊を冷やかしたり市場で買い食いしたり」

「外国、ですよね？　ひとりで？」
「あ、わたし、英語とフランス語はその頃から日常会話くらいできたの。イタリア語もほんの少しなら。母がね、娘になにを期待してたのか知らないけど、ベビーシッターから家政婦から家庭教師からみんなヨーロッパ系の人でそろえたの」
　僕はあきれ半分に嘆息する。それだけで三カ国語を憶えるってものでもないだろう。あのアリスの姉なのだな、とあらためて実感する。頭の出来も普通じゃないわけだ。
「あの頃は楽しかったな。それがずっとそのまま続いていればよかったんだけどね」
　茉梨さんの目も声も遠くなる。
「まあ、無理だよね。不倫だし」
　そこで言葉が途絶える。かといって再びスープに手をつけるわけでもない。僕の皿はとっくに空っぽだった。しかたなく僕はまた口を開く。
「ええと。……紫苑寺の人に、ばれちゃったんですか。お母さんのこと」
「というか最初から知ってたみたい。隠し通せるわけないとは思ってたけど、お祖父様の命令で黙認されてたの」
「なんでですかね」

話を聞く限り、その紫苑寺光厳というアナクロな男ならば、自分の期待を裏切るような不義に激怒しそうなものだけれど。

「わからない。でも父様はね、不倫で紫苑寺の後継者としての資格がなくなればいい、みたいに自棄になってたらしいの。お祖父様はそれを見抜いていたからとがめなかったのかも」

僕は変な味のする口の中を熱い烏龍茶で洗い流した。

嗣ぎたくないからわざと愛人との間に子供を作り、嗣がせたいからわざとそれを看過する。ほんとうに気持ち悪い世界だった。

そこでふと思い至る。吾郎先生が死を装ったのも、女性関係を清算する目的以上に、いま持ち上がりつつあるこんがらがった遺産相続問題に巻き込まれないようにという意図があったのではないだろうか。

茉梨さんは自虐めいた笑みを唇に浮かべて話を続けた。

「それから、じきに二人目ができちゃった。それが有子。難しい妊娠で、母体も赤ちゃんも危ないかもしれないってことで、紫苑寺の力に頼ることにしたの。さすがに一族の人たちへの体面があるから、紫苑寺の経営している病院に大っぴらに入れるわけにはいかなかったみたいだけど、知り合いの病院に受け入れてもらって、そこに大金を投入して最新鋭の機器と優秀なお医者さんをそろえてね」

四代目の推測はなにからなにまでぴったり的中していたわけだ。

「そのへんはアリスからもちょこっとだけ聞いてます」と僕はまた口を挟んだ。茉梨さんがワインで唇を湿らせてからまた黙ってしまったからだ。「お母さんは、アリスを産んですぐに亡くなったって。難産のせいで、ってことですか?」

「んん。まあ……ね」

なんだかはっきりしない言い方だった。

「だから有子は紫苑寺の屋敷で育ったの。お祖父様が『絶対に外に出してはいけない』って言いつけていたから、部屋に閉じ込められて、身のまわりの世話は全部お手伝いさんがやって。わたしもその頃にはもう紫苑寺の家で暮らすようになってたんだけど、有子にはたまにしか逢わせてもらえなかった。普段どういう生活してたのかも全然知らないの。物心ついた頃からずっとパソコンばっかりいじってたみたい。紫苑寺家の人たちとも、たぶん全然接触なかったと思う。顔を合わせるのはわたしと、あとは吾郎おじさまくらいだったんじゃないかな」

そこでしばらく、宙にぷかっと浮かんだ煙のような沈黙があった。

やがて茉梨さんはワインで唇を潤して声の調子を変えた。

「有子が紫苑寺家を出たのも、吾郎おじさまがきっかけ」

吾郎先生がたまに実家に戻ってきては繰り広げた騒動について、茉梨さんは愉快そうに語り出す。それを聞きながら僕はかすかな違和感をおぼえた。これまで、様々なことを詳らかに語っていたのに、重要

な二つのポイントを素通りしてしまったからだ。
一つ目は母親の死因。
お産に身体が耐えられずに、ということかと思っていたら、なんだか不明瞭な答え方をされて、あやふやのまま次の話題に移ってしまった。もっとべつの、あまり語りたくない理由だったのだろうか。
二つ目はアリスが閉じ込められていた理由だ。
愛人の子供だからというだけで、生まれて以来ずっと軟禁するなんておかしい。紫苑寺家の名誉にかかわるから存在自体を外に知られたくなかった？　それなら茉梨さんが自由でいられた事実と矛盾する。
他に理由があるんじゃないのか。
どちらも、深く踏み込んでは訊けなかった。言いにくくて僕の質問を待っていたのであれば次の話に進めたりはしないだろう。ほんとうに話したくないことなのだ。
茉梨さんの語る吾郎先生の話はアリスとの交流のくだりに差しかかっていた。
「そのへんのいきさつは鳴海くんも吾郎おじさまから聞いてるんだっけ？」
「いえ、あまり。聞かせてもらったのは楽しい話ばっかりで」
「そうか。おじさまはそういう人だもんね」と茉梨さんは微笑む。「おじさまが紫苑寺家に戻ってくるのは年に一度か二度だったんだけど、そのときに有子から相談されてたみたい。それで、おじさまは有子の言

う通りに屋敷のあちこちに忍び込んで、セキュリティを切る仕掛けをして回ったんだって。当主の弟だからなんとか怪しまれずに済んだってわけ」

　そして八年前のある日、アリスは脱出計画を決行に移す。警備システムをクラッキングして部屋のロックを外し、広大な屋敷の中を裏口に向かってひた走った。

「でも非常階段のところでメイドに捕まっちゃったの。屋敷じゅう大騒ぎになった。わたしもそのときは家にいたから、すぐに駆けつけた。お祖父様は真っ赤になって怒ってた」

「え？　じゃあどうやって抜け出せたんですか？」

　茉梨さんは深い痛みをこらえるように眉根を寄せ、しばらく沈黙した。やがて小さく息を吐いて言葉を継ぐ。

「父様が、……行かせてやってくれ、って……頼んだから」

　声は消え入りそうだった。

　頼んだだけじゃないんだろうな、とわかった。茉梨さんがまたぷっつり黙ってしまったからだ。息子に頼まれただけでアリスを解放するような人物なら、最初から監禁なんてしないだろう。なにかあったのだ。ここも、やはり茉梨さんが触れられない場所。

　そこで僕は思い出す。アリスと茉梨さんの会話だ。たしかあのとき茉梨さんは言っていた。祖父が入院した、父が入っているのと同じ病院だ、と。

二つの事実が読み取れる。父親――紫苑寺光紀は、当主――紫苑寺光厳よりも先に入院していたこと。そしてあの言い方からして、アリスもそれを知っていたということ。

アリスは家を出て以来、紫苑寺とはまったく関わりがなかったはずだ。それでも父親の入院を知っていた、ということは――

父親が入院する原因となったなにかが起きたのは、アリスが逃げ出す前。というよりも、今し方茉梨さんが語った、アリスが屋敷から逃げ出そうとするまさにそのときだったのではないだろうか。

「でも、有子は家を出てほんとうによかったよ」

茉梨さんが声を無理に明るくするので、やっぱり僕はなにも訊けなくなってしまう。

「今の有子は幸せそうだよね」

乗り遅れた船を波止場で見送るみたいに哀しげな笑い方で彼女はそう続ける。

「あんないい人たちに囲まれて。ラーメンもアイスクリームも作ってくれる素敵なお母さんもいて。なんでも言うこと聞いてくれるかわいい助手もいて」

「なんでもは聞きませんよ……」と僕は苦笑する。

「うらやましいな。わたしが今さらしゃしゃり出てきていっしょに暮らそうだなんて、有子にとっては邪魔なだけだよね、きっと」

首を振ってみせることさえできなかった。

たぶんその通りだろう、としか思えなかったからだ。

「虫が良い話なのは自分でもわかってるの。実家にいた頃の有子には手助けひとつできなかったのに。きっと有子はそのことでわたしを恨んでるだろうし」

僕は息を止め、様々な想いを喉の奥に押し戻した。ここは、言わなきゃいけない。

「恨んでないですよ」

茉梨さんは雨の予感のたまった目で僕を見つめてくる。アリスそっくりの深い夜色の瞳。

「……どうして?」

「アリスはそういうことで人を恨むようなやつじゃないです」

まつげが何度か伏せられ、瞳の靄を払う。

「鳴海くん、やさしいね。なぐさめてくれてるの?」

僕はむっとして答えた。

「なぐさめじゃないですよ。アリスの名誉のために言ってるんです。だいたいなんのなぐさめにもならないでしょ、べつに好かれてるわけじゃないんだから。アリスは見ての通り、茉梨さんとは関わりたくないって思ってるんですよ。面倒だから」

「やっぱり、やさしいね。わたし、鳴海くんのそういうところが大好きだよ」

そこで茉梨さんはグラスを持ち上げ、ワインを一息に飲み干してしまう。

「ほんとに、有子がうらやましいよ」

✽

どう話していいかわからなかったので、アリスには茉梨さんと逢っていることを隠していたのだが、無駄に鋭いやつなので翌日事務所に顔を出してすぐにばれてしまう。

「ふん。また姉様とこそこそ密会していたんだね」

「……え、え？」

うろたえたところを見せてしまったので言い訳もきかない。

「なんでわかったの」

「その服！　ぼくの与える薄給で買えるような服じゃない。というか、それは姉様のブランドの服じゃないか」

僕は思わず自分のTシャツを見下ろす。カジュアル服も何着か茉梨さんにもらったのだが、僕のファッションセンスでは普段着ている安物とさほど区別がつかず、どうせばれやしないだろうと思って事務所にも着てきたのだ。見くびっていた。

「ええと、うん、そのう……買ってもらったんだ」

「姉様のヒモになるつもりなら今ここで解雇するよ！」
「い、いや、そんなんじゃなくて、ほら、あの人って身のまわりの人間のファッションも気になっちゃうたちだから」
「きみとなにを相談したところで、姉様と同居なんてするつもりはないよ。びしっと言っておいてくれたまえ」
「ああ、うん……」
僕は茉梨さんの心底さみしそうな目を思い出す。今の言葉を正直に伝えたらまた哀しませてしまうだろう。アリスと瓜二つの顔であんな表情をされるとほんとうに胸が痛くなるのだ。
「茉梨さんがここにたまに遊びにくるくらいなら、べつにいいんだよね？」
アリスはむっとした顔になる。
「追い返すのもめんどうだからきみが相手をしたまえよ。姉様はぼくを着せ替え人形かなにかだと思ってるんだ。ぼくにどんな服を着せたいのかという話しかしない。ぼくが家を出た理由の一万分の一くらいは姉様が鬱陶しかったからだよ」
「ああ、その反動でいつも同じかっこうしてるんだ」
「同じじゃないぞっ」アリスは長い黒髪を跳ね上げて憤った。「毎日洗濯しているくせに見分けがついていないのかい、ぼくのパジャマは二十三種類あって色合いもクマの柄もみんなちがうんだよ！　メーカーが同じだけだ！」

そうだったのか。助手になって一年半、今さら明かされる衝撃の事実だった。どれも似たようなものだろなんて言ったら空き缶が何本飛んでくるかわかったものではないので僕は言葉を呑み込む。

「紫苑寺の家にいた頃は毎日毎日ふりふりの装飾過多の服ばかりだったからね。せいせいしているよ。このパジャマの青は自由の色だ」

　ひきこもりのくせに自由の大空もないもんだ。

　しかし、やっぱり茉梨さんの言っていた通りなのかな、と僕は思う。茉梨さんがどれだけ妹を想っていたところで、アリスにとっては生活を掻き乱す邪魔者になってしまう。今の探偵稼業の暮らしに満足してるだろうし。

　……してるのかな?

「ねえ、アリス」

「なんだい」とアリスは生返事しながらベッド脇に積まれた赤い缶の山に手を伸ばす。

「いま幸せ?」

　アリスはベッドと壁の隙間に落っこちた。ドクターペッパーの山が雪崩を起こして彼女の黒髪の上にばらばら降り注ぐ。

「な、なんだいきなり」

ベッドに這い上ってきたアリスの髪はぐしゃぐしゃに乱れている。そんなにずっこけるようなことを訊いただろうか。

「いや、その、今の生活で幸せなのかなって」

茉梨さんには幸せに見えたらしいけれど、実際どうなんだろう。

「考えたこともないよ。自分が幸せかどうかだって？　そんなの、天気だの酒量だの占いの結果だの靴紐を結ぶ順番だのにいくらでも左右される主観値じゃないか」

「そうか。そうだよね。変なこと訊いてごめん」

論理と知性だけをもってして世界を読み解く探偵に対して、愚かな問いだった。

「そういう愚問がするする出てくるきみはさぞかし幸せなのだろうね。少し分けてもらいたいくらいだ」

「皮肉らないでよ。そりゃあ僕だってアリスを幸せにしてやれたらいいと思うけどさ」

アリスの顔は熱湯に放り込んだ海老みたいにいきなり赤くなった。

「なっ、なんだいそれはっ」彼女の両手が白いストッキングの膝をぱたぱた叩く。「き、きみがぼくをっ、し、幸せにするだってっ？　ど、どういう意味で言ってるんだいっ？」

「こっちが訊きてえよ」どういう意味で言ったと思ってんの？

「まったくきみはここ最近おかしいぞっ、婚姻届を持ってきたり同居の話をしたりっ」

またそっち関連かよ。おかしいのはおまえだ。ちょっと落ち着けって。

「だいたいきみはまだ十七歳だろう、ぼくだってさすがに十六にはなっていないはずだよ！」
「あと一年待てってこと？」
「だれがそんなこと言ったんだッ」
「ごめんごめん、冗談だって」あまりにものすごい反応をするので面白くてつい。
　アリスが次々に投げつけてくる空き缶を片づけながら、これが幸せというものなのだろうかと僕は哲学的な感慨にふけった。だとしたら、ずっとこんな日々が続くのも悪くない。

＊

　でも、一度転がり出したものはもう止まりはしなかった。終わりの始まりは、夜中のうちにアリスから届いていたこんなメールだった。
『東新宿にある「アスタ・タタリクス」という会社に11時に行くこと。受付の電話で藤島鳴海の名前を出せば通してもらえるようになっている。説明が面倒なのでどういう用件かはあちらで聞くように』
　なんだそれは、と言いたくなる命令だったが、アリスの理不尽な要求は今に始まったことではないので、深く考えずに電車に乗り、アスタ・タタリクスなるその会社の所在地をネットで調べた。東新宿駅の出口に直結したばかでかいオフィスビルなので迷う心配はなかった。どうやらIT企業がこぞってオフィスを構

えている真新しいお洒落なビルらしい。エントランスの各階案内板を見ると、見憶えのある企業名がいくつか見つかった。例の香港マフィアが経営するゾディアック社も入居している。

十四階のエレベーターホールのガラスドアには“Aster tataricus”という紫色のロゴがペイントされていた。ぽつんと置かれた電話を取り上げ、書いてある指示通りの番号を押すと、感じのいい女性の声が応対してくれる。

「藤島鳴海と申します。あの、11時に約束があるらしいんですけど……」

『藤島さまですね、うかがっております』

アリスからのメールにあったように、話がすでに通してあるらしいので僕は安心した。

それにしてもなんの用事なんだろう。案内の人が来るのを待つ間、ガラス越しにオフィス内の様子をうかがう。どういう企業なのだろう、ネットで調べてみようか、と迷っているところでドアの向こうに人影が差した。パンツスーツ姿の若い女性社員だ。

オフィスの中に招き入れられる。びっくりするくらい静かで人の気配がしなかった。社員が少ないのだろうか。廊下のいちばん奥のドアの前まで連れていかれる間、他に一人も見かけなかった。

「社長、藤島さまがお見えです」

女子社員がインタフォンを押してそう言うので僕はいっそう緊張する。社長室？　しかもこの厳重さはなんなんだ、ドアは自動車で突っ込んでもびくともしなさそうな頑丈な鉄製だし、隅にセキュリティ会

社のステッカーが貼ってある。インタフォンにカードリーダがくっついているところを見るとここも電子ロックなのか。

ドアの真ん中に取りつけられた小さなランプが青く明滅した。

僕はそのとき、背筋に悪寒をおぼえた。

インタフォンに、入室許可の青ランプのサイン。記憶にある。というか、毎日見ている。

電子ロックが外れる冷たい金属音が響く。女子社員がノブを回して、分厚く重たいドアを引いた。隙間から冷たい空気があふれ出てきて、僕を押し戻そうとする。

「どうぞ」

女子社員はにこやかに僕を室内へと促した。

「ああ、お寒いだろうと思いますけれど」彼女はかすかに顔を曇らせた。「社長の趣味なんです。機器が熱に弱いという理由もありますけれど……申し訳ございません」

いつまでも立ち尽くしているわけにはいかなかった。僕は部屋に踏み込み、細かい氷の粒が混ぜ込まれているような刺々しい空気をおそるおそる呼吸し、見回す。

荒涼とした空間だった。床には毛足の短い紫色の絨毯が敷き詰められ、調度のたぐいは正面奥のシンプルな白いデスクだけ。夕暮れの海に孤独に浮かぶ難破船の欠片みたいだ。その向こうの壁は一面ガラス張りになっていて新宿の摩天楼群を見晴らしている。

「そんなところに突っ立っていないで、こっちまで来てください」
まるで人の気配がなかったのに、そんな声がして僕はぎょっとする。
こちらに背を向けていた椅子がくるりと回った。背もたれに深く身を沈めていたのは、若い男だった。丈の長い白衣を肩から無造作に羽織り、くしゃくしゃの癖毛をヘッドフォンで押さえつけている。縁なしの眼鏡の奥の目は誘蛾灯のような静かで危うい光をたたえている。視線を一瞬合わせられただけで寒気がした。
「聞こえなかったんですか？　こっちまで来てください。愚図に割く時間はありません」
男はあきれた口調で言って、膝の上に広げていた分厚い革表紙の本をデスクに置いた。
聖書――だ。
僕はかちこちにこわばった唾を喉の痛みをこらえて飲み下し、一歩、また一歩、紫のカーペットの上に踏み出す。だれだこいつは？　どうしてアリスは僕をこんな男のところによこしたんだ？　その疑問の答えが、僕の内側から皮膚を突き破って出てこようとしていた。
デスクに目をやる。三面モニタが並んでいる。僕は目を見開く。見憶えがあったのだ。モニタだけではない、キーボードも本体も、アリスが使っているものとまったく同じだ。
「茉梨さんが君に真っ先に逢ったという話を聞いたので、少々興味が出て、直に見てみようかと思ったんです」

男はヘッドフォンを指でこつこつ叩(たた)きながら冷淡(れいたん)な口調で言った。

「いくつか質問があります。答えたら速(すみ)やかに帰ってください。一つ目。君は有子(ゆうこ)がなぜ自分をそばに置いているのかわかっていますか？」

「あの、それより——」

「質問するのは私です。君じゃない」

　僕は絶句(ぜっく)した。なんなんだ。それがひとに質問する態度か？　だいたい人と喋(しゃべ)っているときにヘッドフォンをつけたままって、なに考えてるんだ？　目の前の小賢(こざか)しいデスクを蹴倒(けたお)してさっさと部屋を出ていくべきだったのかもしれない。でも、できなかった。よくわからないがこの男は危険だ。何者なのか、僕にどうして関わろうとするのか、なるべく多くのことを見極(みきわ)めておかなくちゃいけない、と思った。

「わかりません」と僕は渋々(しぶしぶ)答えた。「でも、他にいないからじゃないですか」

　男はゴルフの芝目(しばめ)でも読むような目つきで僕の顔をじっと見つめてきた。

「二つ目です」息をつくのとほとんど変わらない静かな声。「君が有子がなにをしようと、どんなものを求めようと、どんな境遇(きょうぐう)に置かれようと、受け入れる覚悟(かくご)がありますか？」

　なにが訊(き)きたいんだこいつは、と僕は思った。そんな抽象的(ちゅうしょうてき)な質問をされても答えようもないだろう。

「ないですよ」と僕は肩をすくめた。「なに言ってるのかさっぱりわかりませんが、たとえばアリスはよく僕をベッドから突き落とそうとしますけど、毎回抵抗(ていこう)しますよ。なんで受け入れなきゃいけないんですか」

二割くらい皮肉、一割くらい冗談のつもりで言ったのだが、男の表情は部屋の気温よりもなお冷え切ったままだった。

「ベッドではなくビルの屋上からなら?」

「もっと抵抗しますよ!」

しなきゃ死ぬじゃないか。当たり前だろう。ほんとになんなんだ。

男はデスクに肘をついて眼鏡のつるに指先をあてた。

「では三つ目。君は有子がどれぐらいの人数の有象無象の生命に匹敵する価値があると考えていますか?」

しばらく死にかけの金魚みたいに口をぱくぱくさせてしまった。やっぱりさっさと帰ればよかった、という後悔が喉の奥から滲み出てくる。

深呼吸して状況を整理する。まず間違いなくこの男は紫苑寺家の人間だ。アリスと茉梨さんを知っているし、どちらも呼び捨てにしている。顔立ちにもどことなく通じるものがある。そして僕をここに来させたあのメールは、たぶんこの男が送信者を偽装して出したものだ。

わかるのはそこまでで、相手の目的はさっぱり見えない。

「質問を繰り返させないで。一億人単位で答えてください」

男はさらに言った。他人の生命とアリスを天秤にかける。一億人単位。馬鹿じゃないのか。僕はようやく自分がかなり怒っていることを認識できた。

　息をついて口を開く。

「どういう意味で、ですか？　ああ、質問には答えないんでしたっけ？　じゃあ回答不能ってことにしといてください。なんか命の価値がどうとか言う人よくいますけど、命に価値なんてないですよ。交換できるものにだけ価値っていう考え方が適用できるんです。命はあげることも受け取ることもできないでしょ。それともあなたは一億人の命を受け取って自分が一億回殺されても生き返れるようにできるんですか？　命の価値ってのはべつのなにかを大げさに聞こえるように言い換えてるだけです。言い換えずに正直に訊いてくれなきゃ答えられません」

　それまでさんざんたまっていたいらだちを残らず言葉にして叩きつけていた。男の表情がはじめて少し揺らいだ。ちょっといい気分だった。冷静に考えるとおかしな理屈だったけれど、反撃できた気がしたのだ。

　でも男はすぐに冷淡な顔に戻って言った。

「四つ目の質問です。私の会社で働く気はありますか？」

「は？」

　驚きのあまり変な声が出てしまった。

「年俸は千二百万円を確約します」

今の流れでなぜそんな話になる？　でも言葉のキャッチボールを拒絶され打席勝負だけを求められている以上、答えるしかなかった。

「まっぴらごめんです」

「理由も」と男は人差し指を立てる。

「僕はあなたが好きになれそうにありません。気に食わない人の下で働くなんていやです」

「私は君に好いてもらうように努力することもできます。それでもですか」

　さすがにしばらく絶句するしかなかった。じゃあその努力を今ここでしてくれよ、という言葉もとっさには出てこなかった。紫苑寺の人間なのだ、と僕はあらためて痛感した。これまでに出逢ってきた三人――アリス、吾郎先生、そして茉梨さん――にも共通する奇妙な力がこの男にも備わっていた。好悪とはべつの次元から人を引きずり込む力だ。**好いてもらうように努力することもできます**。たぶんほんとうにできるのだろう、と僕は思う。それがかえって気持ち悪い。

「それでもいやです」

　そう答えるのがやっとだった。

「残念です」

　彼はさして残念でもなさそうに言った。どうして残念なんて言葉が出てくるのかまるで理解できなかった。なんなんだ。僕は五十回目くらいにそう思う。こいつはほんとになんなんだ？　僕をおちょくるために呼びつけたのか？

「最後の質問です」と男は言った。「君の人生から有子が消えたら、君はどうしますか」

これまでの五つの中でいちばん簡単な質問のはずだった。だれでもいつかはいなくなる。具体的で現実的な問いだ。でも僕は今度こそなにも答えられなくなった。わからない、とさえ言えなくなった。

僕自身が、昨日テツ先輩やヒロさんや少佐に投げかけたのと同じ問いなのに。

理由はわかっていた。僕は直観していたのだ。目の前のこの奇妙な白衣の男が、アリスを僕から奪っていく者だ、と。

ただうつむきかけて首を振ることしか――できなかった。

男はなにかあきらめたように鼻から細く息を吐いてうなずいた。

「では、以上です」

椅子を回して再び背を向けようとする彼に、僕は詰め寄りかけて、一歩目で身をすくませてしまう。なにをしようとしたのか自分でもわからない。

彼は横目で僕を見て言った。

「ひとつだけ、質問を受け付けますよ」

はっとして顔を上げる。

彼なりの礼のつもりなのか。いや、そんなわけはない。そういうタイプじゃない。まだ僕を測ろうとしているのか。

なにを訊けばいいだろう。いま必要な情報は——この男がアリスの味方なのか敵なのか？　どれだけのことができるのか？　アリスや僕をどうしようとしているのか？　紫苑寺家でなにが起きているのか？　……どれも核心ではない気がする。質問はひとつだけなのだ。もっとピンポイントで、この男を撃ち抜く言葉を——

　しばらくじっと考え、口を開く。

「アリスがハードロック好きなのは、あなたがそうやっていつもMr．BIGを聴いていた影響ですか？」

　男は目を見開いて、何度か瞬きした。彼の顔を覆っていた薄いガラスみたいな無表情が音もなく砕けた。はっきりと笑ったり怒ったりしたわけではない。でも、たしかになにかの感情が表れていた。僕の思い込みではなかった。彼はそこでようやくヘッドフォンを外して首まで下ろしたのだ。

「はったりで言ったんですか？　それともほんとうに聞こえていたんですか」

　僕は安堵の息をついた。ようやく扉が開いた——そんな感じだった。

「さっきのが最後の質問じゃなかったんですか？」

　対話ができるようになったとたん皮肉が出てきてしまうのもどうかと思ったけれど、言わずにはいられなかった。彼はさらりと答えた。

「追加質問は君に対する敬意が芽生えた証拠です」

　平然と言われてしまうと本気なのか冗談なのかわからない。

「ほんとうに聞こえたんですよ。『ロスト・イン・アメリカ』でしたよね」

　曲名まで言ってみせると彼はヘッドフォンを首から抜き取ってデスクに置いた。さっき外すときに演奏を止めたのだろう、今はなにも聞こえてこない。

「君の推測通りです。私が有子にすすめました。80年代の西海岸のナイーヴなハードロックが、いちばん作業が捗るんです」

　予想していた答えなのに、僕は絶望に沈みかけていた。

間違いない。この男はアリスにコンピュータという翼を与えた師匠だ。

　帰り際に渡された、プラスティックらしき素材の分厚い名刺には、こう書いてあった。

『株式会社アスタ・タタリクス　代表取締役　紫苑寺螢一』

　地下鉄に揺られながら、株式会社アスタ・タタリクスについて検索する。

天才プログラマの紫苑寺螢一によって創業、企業向けのネットセキュリティの分野で瞬く間に業界トップにのしあがり、準大手ネットメディアを買収、金融業にも進出……。

　行く前にもうちょっと調べておけば心の準備ができたのにな、と悔やむ。それでもなにかちがった対応が取れたとは思えないけど。

名刺を見下ろし、ポケットにねじ込み、列車のドアに半身を押しつける。

さて、アリスにどうやって話したものか。黙っているわけにはいかないけれど、説明の仕方をちゃんと考えないとたぶん叱られる。確認はとっていないけれど偽装メールに引っかかってまんまと呼び出されたわけだし。

ああもう、なんだってこんな面倒に巻き込まれてるんだ？　紫苑寺家がなんだってんだよ、放っておいてくれよ、僕もアリスも。もう何年も連絡さえなかったんだろ、じいさんが入院したくらいで今頃なんなんだ？

ポケットで携帯が震えた。取り出してみるとアリスからだ。

『早く来たまえっ！　どこでぐずぐずしてるんだい！』

泣きそうな声でアリスが言った。僕は首をすくめて乗客のまばらな車内を見回す。

「電車の中だよ、いま向かってるところ。どうしたの？」

『実家の連中が大勢よこしてきたんだよ、弁護士だの医者だの！　今も事務所の前に居座ってるんだ、なんとかしてくれたまえ！』

医者？　弁護士？

車内放送が次の駅名を告げる。とにかく急いで行く、と言って僕は電話を切った。

僕が『はなまる』に着いたとき、昼飯時で店内も外のテーブル席もすでに満席だった。厨房でミンさんが中華鍋を振りながら言う。

「悪い、なんかアリスんとこに変なのが大勢押しかけたみたいだけど、わたし今手が離せないから！」

返事する時間も惜しく、僕はそのまま非常階段を駆け上がった。３０８号室の前にコート姿の男が三人、ドアを囲むようにして立っているのが見えた。

「お嬢様、お願いします！　お開けください、会長はもう今日明日でもおかしくないお身体なのです、一目だけでもお嬢様に逢いたいと！」

肥り気味の初老の男がドアにへばりついてやかましく哀願している。僕は階段の途中で身を低くして三人の様子をうかがう。弁護士と医者。なるほど風貌や身なりがそれっぽい。今わめいてるのが弁護士で、痩せぎすの眼鏡の中年男が医者だろうか。もう一人のいちばん若い三十代くらいの体格の良い男はボディガードか運転手？

携帯がポケットで震えた。

『３０９号室から窓伝いに来たまえ、五秒間だけ鍵を開ける！』

アリスの悲痛な声に僕は非常階段の最後の三段を一息で駆け上がって廊下を走った。３０９号室のノブを握ったとき、三人とも僕に気づいた。あわててドアを開けて身体を中に滑り込ませ、叩きつけるように閉じ、すぐに鍵を閉める。

探偵事務所の隣室は氷点下に冷房された機械室だ。薄暗いワンルーム内に天井までの高さの金属製ラックが並び、コンピュータの筐体がぎっしりと詰め込まれ、配線がその合間をのたくっている。僕も二、三回しか立ち入ったことがない部屋だったので、足早に通り抜けるだけでも緊張した。断熱カーテンを押しのけてガラス戸を引き、ベランダに出て隣の３０８号室に飛び移る。アリスが窓を開いて迎え入れてくれた。

「なにがあったの？」

「こっちが訊きたいよ！」とアリスは僕の腕にしがみついて泣きそうな声で言う。事務所のドアはまだノックされ続けている。魚眼レンズからのぞくと、まだ三人ともドアを囲んでいる。

「お嬢様、お願いします、なにとぞ！」

脂ぎった初老の男が唾を飛ばしている。僕は顔をしかめてドアから離れた。

「紫苑寺の顧問弁護士だよ、実家にいた頃に一度見たことがある」

寝室に戻るとアリスが言う。

「眼鏡の方はぼくがたまに世話になっている医師団の一人だ。なんなんだ今さら、お祖父様がどうなろうがぼくの知ったことじゃない。こんなふうに押しかけてきて、ぼくがにこやかにドアを開けるとでも思ったのかい？」

僕も嘆息して玄関の方を見る。茉梨さんもこれから紫苑寺家の人間がアリスに群がってくると言っていたが、まさかこんな頭の悪い直接的手段でくるなんて思わなかった。なにを考えているんだろう？　監視カメラまで仕掛けているアリスが、応じるわけがないだろうに。

「うるさくてかなわない。テツも呼んでなんとかしてもらおう」

アリスはテツ先輩に電話をかけるが、出ないようでいらだたしくメールに切り替える。

「まったく、大事なときにつながらないんだから！　きみにも四回もかけたんだよ」

「ああ、ごめん。ちょっと、その……」

あの白衣の男のことは今話しておくべきだろう、と僕は自分に言い聞かせる。

「新宿に行ってたんだよ。アスタ・タタリクスって会社、知ってる……よね？」

アリスは目を見開いた。ああ、やっぱりあのメールは偽装だ、と僕は確信する。

「あ、あの会社に行ったのかい？　なぜ？」

僕は携帯メールを見せる。一瞬の間の後でアリスはすべて理解したようだった。

「こ、これは偽メールだよ、きみをおびき出すための！」

「うん、どうもそうだったみたい」

そこでアリスははっとした顔になって僕に詰め寄ってくる。

「なにかっ、なにか受け取らなかったかいっ？」

「え？　いや、なにも――ああ、名刺くらいかな」
「名刺ッ？　見せたまえっ」
　彼女の剣幕に面食らいながらも、僕はポケットから名刺を取り出して渡す。引ったくったアリスは名刺を矯めつ眇めつし、爪でこすったり曲げようとしたりした。やがてぱきっと二つ折りにしてゴミ箱に放り込む。
「……アリス？　な、なにして――」
「やられた。リモコンだ」
「え？」
　僕はゴミ箱を凝視する。たしかに名刺の折れ目に金属のようなものが見える。あんな薄型のリモコンがあるのか？　というか、なんのリモコン？
「これを渡すのがきみを呼び出した目的だよ、うちのエアコンを停めて――ああそうだ、機械室にも入れてしまったんだった。……ハングアップしている。オーバーヒートか」
　アリスは悔しげに唇を噛み、キーボードに指を走らせる。システムを再起動させると、六面モニタに大量の緑色のテキストが高速スクロールする。僕はまだ事態をのみ込めていない。なによりも、アリスの顔に浮かんだあからさまな絶望の理由がわからない。
「あ、あの、どういうこと？　エアコン停めてどうなるの」

「CPUが熱暴走する。影響はわからないけれど、あの男ならその隙をついて──」
アリスの声はぷっつりと途切れた。僕もまた言葉を失って、モニタの群れを呆然と眺め渡すしかなかった。すべての画面に、あの白衣の男の顔が映し出されていた。
『久しぶりですね、有子』
スピーカーが声を伝えてくる。アリスの指はキーボードの上で力を失う。
「螢にいさま……」
『ソフトウェアは及第点ですが、もっとハード面に気を遣えと教えたでしょう。マシンルームに家庭用の空調を使うなど言語道断です』
僕は唖然とする。ゴミ箱の名刺型リモコンをもう一度見やり、寒気に震える。機械室の空調を暖房に切り替え、熱暴走させてセキュリティが働かなくなった隙をついてクラッキングしたのだ。そのために僕を運び屋に使ったのか。
『外に迎えがいるはずですね、すぐに出かける支度をしなさい。さもなければ全消去します』
アリスは唇を血がにじむほど強く噛みしめて、モニタに並ぶ白衣の男の冷酷そうな顔をにらみ返していた。けれどやがて肩を落として立ち上がる。
それは、僕がはじめて見た、クラッカーとしてのアリスの敗北だった。

3

隅田川に面した、巨大な総合病院だった。

裏門から入ってすぐ右手に十字架を戴く礼拝堂が見えたから、おそらくはカトリック系なのだろう。

僕らを乗せたロールスロイス・ファントムは駐車場を素通りして病棟の間を抜け、中庭に入っていった。増築を重ねたらしく、手前の建物は真っ白で現代的なシルエットの七階建てだったのに、中庭の正面に見えるのはかなり古い灰色の四階建てだ。

四代目に教えてもらった、アリスのかかりつけだというあの病院だった。

皮肉なものだな、と思う。存在を知られたくない不実の子の出産のために無理矢理な設備投資をしてレベルを引き上げた病院が、結果として紫苑寺の手持ちの医療機関の中では最新鋭となってしまい、今では御当主と御嫡男の入院先になっているわけだ。

アリスはむすっとした顔で僕の隣のシートに身をうずめている。服装は、淡い萌葱色のドレスで、襟にもカチューシャにも袖にも白いフリルがついていてたいへん人形っぽい。右手には中ぐらいのクマのぬいぐるみであるリッリルゥを抱え、左手は小さなモバイルPCのケースを握りしめている。

4

アリスのいない探偵事務所を、僕ははじめて見た気がする。

冷え切ったベッド。主のいない空間を見つめる数十のぬいぐるみたちの目。電源が落とされたままの六面モニタ。冷風をむなしく吐き出し続ける空調。

僕は大きなクマのモッガディートのそばに腰掛け、シーツのわずかにへこんだあたりに手をやる。もちろん体温など残っていない。

じっとしていたらつまらない想像が次々に涌いてきたので、僕は頭を振って払い落とし、空き缶を片づけ、脱ぎ捨てられたパジャマを洗濯機まで持っていった。けれどスイッチを入れる気力さえ出てこない。

壁際にうずくまり、携帯でネットにつないで国内ニュースを検索する。紫苑寺光紀氏の訃報はまだ出回っていない。昨日の今日だ。財界以外で知られている人物でもないし、すぐにニュースになるわけもない。

彼の死はひっそりと忘れ去られるだろう。長い植物状態の末の自然死として扱われ、棺に押し込まれて跡形もなく焼却されるだろう。紫苑寺螢一が言っていたのだ。刑事事件にはしたくないのですべてを病院内で処理する――と。

刑事事件。
殺人だ。アリスの父親は殺されたのだ。
だからって、どうして。どうしてアリスが疑われなきゃいけないんだ？
チャイムが鳴る。僕は玄関に走っていってドアを押し開けた。
「アリスっ？」
　ドアの外に立っていた彩夏が目を丸くして跳び退いた。
「あ……ごめん」と僕は気まずくなって目を伏せた。アリスが戻ってきたのかと思ったのだが、自分の部屋に帰ってくるのにチャイムを鳴らすわけがなかった。
「アリス、どうしたの？　いないの？」
　彩夏は事務所に入ってくると寝室をのぞき込む。
「ミンさんに聞いたけど、昨日いきなり大勢やってきて連れてっちゃったって……」
　僕はうなずき、力なくベッドにまた腰を下ろす。彩夏は床に転がったままのぬいぐるみをひとつひとつ拾い上げて枕のまわりに並べた。イルカやカエルやアザラシも彩夏と同じように心配そうな目で僕を見ている。
　どうしたのか、とは訊いてこない。僕の言葉をじっと待っている。そのやさしさがかえってつらくて、僕は両膝の間に視線を落として黙り込んでしまう。
「アリスがいないなんてめったにないチャンスだからっ」

彩夏はわざとらしく明るい声をあげた。
「あっちこっち片づけちゃお！」
　ベッドの間に落ちていたタオルや脱いだままのソックスなどを発掘したり、はしゃぎながら濡れ雑巾を手にPCラックの裏の埃を拭き掃除したりしている彩夏を見ていると、ますますアリスの不在がたしかなものに感じられてきて、僕はベッドを立って流しのところまで行き、汚れてもいない手を洗ったり、生ゴミなど溜まっているはずもない排水口を確認したりと無駄な作業で気を紛らわせた。
「そうだそうだ藤島くん！」
　台所までやってきた彩夏が冷蔵庫を開けて言う。
「アリスいないしドクペこっそり飲んじゃおうよ！　二本くらいなくなっててもわからないよきっと」
「前に不味いって言ってなかったっけ」
「すすめられて飲むのと、いないときにこっそり飲むのとじゃ味がちがうかもでしょ」
　僕らは壁に並んで寄りかかり、手に張りつくほどよく冷えた深紅の缶のプルタブを上げ、ドクターペッパーをあおった。形容しがたい甘味が脳髄に突き刺さる。
　薬臭いとか化学合成したライチだとか液化杏仁豆腐だとか表されることもあるが、どれも的外れだと僕は思う。強いて表現するならば、あの小さなニート探偵の複雑怪奇な人生そのものみたいな味だ。濃密で、不可解で、一度知ればけっして忘れられないのに、たしかな言葉にはできない。

「やっぱり美味しくないね」と彩夏が笑う。「水で倍に薄めて半分ずつ飲めばよかったね」
　特別な意味を込めて言ったわけではないと思う。彩夏はそこまで深慮するたちじゃない。でも僕は勝手に意味づけして受け取ってしまう。ひとりで飲み込むより、ふたりで半分ずつにすればいい。彩夏がいつも僕に言ってきたことだ。
「なんでアリスはこんなのばっかり飲んで生きてられるんだろ」
「医者も不思議がってたみたいだよ。遺伝学的に興味があるとかで、毎日診てたみたい。考えてみればあいつ、生き物としておかしいもんな」
「そうなんだ。……アリスの、お医者さんにも逢ったんだ？」
「ああ、うん。病院に行ったから」
「アリス、具合悪かったの？」
「そうじゃなくて——」
　彩夏はほんとうにやさしいな、と僕は思う。ごく自然に僕が話せるようにしてくれている。ほつれた糸の端を指でたどるようにして。
　そのやさしさは、毒だ。
　毒が身体に回り、力なく開かれた唇から吐き出される。
「アリスのお父さんが死んだんだ。昨日」

彩夏は僕の顔を見つめて何度か瞬きし、そっと言った。

「……そうなんだ」

その声は、驚いているのでもなく、哀しんでいるのでもなく、怒っているのでもなく、かといって無表情でもなかった。なんというか——犬の名前を呼ぶ飼い主の声みたいだった。

だから次の僕の言葉もほとんど無抵抗に引きずり出されてしまう。

「——殺されたみたいなんだ」

いつの間にか、こんな事件に彩夏も平気で巻き込めるようになってしまったんだな、と僕は思う。知ること——つまりは死ぬことを、平気で共有できるようになってしまった。情報は、分かち合ったところで死に至ることに変わりはない。ただ、飲み込むのが少し楽になる。それだけだ。それだけのために。

「それで、アリスがやったんじゃないかって疑われてる」

言葉にしてみると、ほんとうに馬鹿みたいだった。先を続けられない。僕だってあのぐちゃぐちゃの夜から放り出され、毛布の中で膝を抱えて眠りの中に逃げ込み、目を醒ましたばかりだ。まだ整理できていないのだ。

呆けたような間の後で、彩夏はだいぶ迷ってから言った。

「……みんなも呼ぼうか？　ヒロさんとかテツ先輩とか」

僕は無気力にうなずいた。けっきょくそれしかないのかな、と思う。アリスの問題は僕ひとりの問題じゃないんだし。
三人は彩夏が電話してからものの一分で事務所にやってきた。
「下で待ってたんだよ。様子見てもらうために彩夏ちゃんだけ先に送り込んだわけ」
ヒロさんは悪びれることもなくそう言う。
「ナルミ君、昨日けっきょく真夜中まで帰ってこなかったらしいし、心配でさ。今日は早くから集まってたんだよね」
「ああ、そうなんですね……」
事務所でひとりでぐじぐじしているだろうと完全に見抜かれていたわけか。恥ずかしくなってくる。
……って、あれ？
「昨日の帰りが真夜中だってどうして知ってるんですか」
昨夜は螢一の車でそのまま自宅まで送られたからヒロさんが帰宅時間を知っているはずがないのだけれど。
「ああ、ナルミ君のお姉さんに電話して訊いた。心配だったから」
「姉貴にッ？　な、なんでヒロさんが姉貴の番号知ってるんですか」

「いつゲットしたんだったかな？　ああそう、たしかハロウィンでナルミ君家に迎えに行ったときにさらっと教えてもらったんだよ」

……さらっと言うなよ。どんだけ手が早いんだよ。あのときそんなタイミングあったの？

「さすがヒロさん。呼吸するように女の携帯番号を聞き出しますね！」と少佐。

「そんなことないよ。ミンさんの携帯いまだに番号知らないんだ」

「『はなまる』の番号なら知ってるだろ」とテツ先輩が眠たそうに言う。

「店の電話なんて知っててもデートの待ち合わせに使えないだろ」

「『はなまる』でデートすればいいんじゃねえの」

「いつもしてる。最近は毎日挨拶代わりに愛してるって言ってミンさんに殴られてる」

「さすがヒロさん。呼吸するように女と愛を語らいますね！」

「もー、三人とも！」

彩夏が大噴火した。

「いつものコントやってる場合じゃないの！　藤島くんの話を聞きにきたんでしょ、アリスがいなくなっちゃったんだよ、わかってるの？」

まさか彩夏がニート探偵団を仕切る日が来ようとはだれが想像しただろう。テツ先輩と少佐とヒロさんはベッドの手前に並んで正座し、一応の反省のポーズを見せるので、こっちはかえって話を切り出しづら

くなる。
「はい、藤島くん！　アリスのお父さんが殺されたとこまで話して！」
　僕も探偵団の三人もぎょっとした顔になる。
「なんで藤島くんまで驚いてるの。さっき話してくれたことでしょ？」
「い、いや、そうだけど」
　彩夏の口からそんな物騒な単語が飛び出してくるなんて思ってなかった。
　しかし考えてみれば今さらだ。彼女は僕と一緒に大量の死体さえ見ているのだ。様々な形の死について、ある意味では僕よりもよく知っている。それが強さなのか、鈍さなのか、その二つの名前で呼ばれるなにかべつのものなのか、わからない。
　僕は息を止めて、ひどく長かった昨日という一日をまた最初からたどる。まだ一夜過ぎただけだというのに、どの場面を思い浮かべても記憶はくすんでいる。あれはほんとうにあったことなんだろうか。あの病院や不愉快な一族はほんとうに存在するのだろうか？
　咳払いして、妄想を打ち切る。
　現実を見ろ。今ここにアリスはいないんだ。
　病院で見聞きしたこと、紫苑寺家の遺産相続にまつわる争い、そしてアリスの父親の死と、紫苑寺螢一の言葉。一つ一つ話すうちに、部屋の空気は固く凍っていく。

「……それでアリスはどうしてんだ？」
テツ先輩が抑えた声で訊ねる。僕は首を振った。
「事情を聞くために連れていった、って。どことは言ってませんでした。病院内かもしれないし、紫苑寺の屋敷かも」
「事情を聞くってのは要するに尋問か」と先輩は腕組みする。
「なんでアリスが犯人なんて考えが出てきたわけ？」
ヒロさんも顔を曇らせて訊いてくる。
「お父さんの人工呼吸器が外されて警報が出たとき、茉梨さんは僕の部屋に来てたわけです。でも、後で紫苑寺螢一が話を聞いてみたら、寝室にアリスと一緒にいたって言った。廊下ですれちがった看護師や僕の証言と食い違ってる。嘘をついたわけです」
「アリスのアリバイをつくるため、か」
少佐は目を細め、苦い口調で言う。僕はうなずいた。
「紫苑寺螢一はそう考えてます。犯行当時、アリスは部屋にひとりだった」
「だからってアリスがやったことにはならねえだろ。他にも紫苑寺の連中が大勢泊まってたんだろ、そいつらもたいがいアリバイなんてねえんじゃねえの」とテツ先輩。

「僕もそう言いました。でも、病室の電子ロックには開閉の履歴が残るんだそうです。人工呼吸器が外される少し前、茉梨さんのカードキーで紫苑寺光紀の病室のドアが開けられています。茉梨さんは僕の部屋に来てましたから、それができるのはアリスだけだって」

少佐がむすっとした顔で言った。

「そんなのどうとでも言えるだろう、警察が踏み込んで調べたわけじゃなし。その病院は紫苑寺家の息がかかってるんだろう？」

「そうなんですけどね……」

「だいたいなぜアリスが実の父親を殺さねばならんのだ」と少佐。

「アリスには動機もあるって紫苑寺螢一は言ってました」

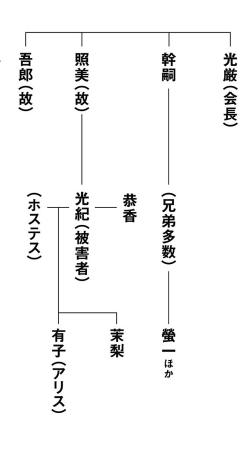
「……まさか、相続したくないから親父さんを殺した、って言ってるんじゃないよね」

ヒロさんが声をひそめる。

「そのまさかなんです」と僕は肩を落とした。

「むちゃくちゃだ。言いがかりじゃないか」とヒロさんは憤慨した。「そんな理由で人を殺すわけないだろ。動機なんて話だったらもっと得するやつらがいっぱいいるじゃないか。アリスの親父さんが相続前に死んじゃえば、その会長の弟だっけ？　そいつが丸儲けだろ？　そっちの方がよっぽど怪しい」

僕も心底そう思う。

「ごめん、あたし、ちょっと話についてけなくなった……　人の名前がいっぱい出ててみんな紫苑寺だから……」と彩夏が泣きそうな声で言った。無理もない。当人たちの顔を見た僕でさえわけがわからないのだから。
　少佐が差し出したノートに、僕は知っている限りの紫苑寺家系図を書く。

「……こりゃ吾郎先生逃げ出すわけだよ。めんどくさそう」
　ヒロさんが家系図を見ただけでうえっと舌を突き出す。（故）と書いてしまったが、吾郎先生は死亡を装ってオーストラリアに逃げただけで、実際は今もぴんぴんしているはずだ。ただ、相続問題の上ではいない扱いになる。
「光厳会長の奥さんは？　いるなら遺産は半分その人のものだけど」とヒロさんが僕を見る。

「早くに亡くなってるそうです。子供もいないんです」
　そのせいで相続問題がこじれにこじれているのだ。
「なあなあ、この照美って人の旦那は？　照美に相続させようとしてんだろ、旦那が生きてんならその人のものじゃねえの？」テツ先輩が言った。
「ああ……そっちは話にも出てきませんでしたけど。あの場にいたのかどうかも……」
「関係ないよ」とヒロさん。「配偶者は代襲相続人になれないんだよ。この場合、照美の代襲相続ができるのは光紀だけ。んで、兄弟姉妹の相続人の代襲は子の代まで。孫の代、要するに茉梨さんとかアリスは代襲の代襲ってわけにはいかない。相続した後に死んだんなら話はべつだけど、する前だからね。遺言で遺贈が指定されてなきゃ、この場合は幹嗣ってじいさんが総取り」
「ヒロ、おまえなんでそんなに遺産相続なんかに詳しいんだよ……」
　テツ先輩があきれ混じりに感嘆する。
「マダムとのピロートークでさ、たまにこういうの愚痴られるんだよ。旦那の父親がそろそろ危ないとか相続税がどうとか。だから自分でも色々調べたりして憶えちゃった」
　生々しいからやめてくれ。詳しいのはありがたいけどさ。
「ええと、つまり」彩夏がおそるおそる言う。「アリスのお父さんが会長さんより先に死んじゃったら、アリスが相続しなくてもよくなる――ってのは、ほんとなの？」

「そうなるね」とヒロさんはうなずく。「だからってそんなことしないだろ。相続なんて放棄すりゃいいだけなんだ。相続争いの面倒に巻き込まれるのがいやだから親父さんを殺すなんてあり得ないよ、なに考えてんだそいつ」

「警察沙汰にしねえで内輪でもみ消すつもりなら、そもそも犯人がだれかなんてどうでもいいんじゃねえの」

「紫苑寺家の連中はそのつもりかもしれないけどさ」とヒロさん。「被害者の奥さんとか親族は納得しないだろ」

「ああ、そうか……」

「客観的に考えて、怪しいのはこの幹嗣という老人とその子や孫たちじゃないですか」と少佐も憤りをにじませた口調で言う。「というか、その螢一とやらの方がよほど動機が強いですよ。案外そいつがやったのにアリスに罪をなすりつけようとしてるんじゃ」

「ナルミ、どうなんだ。螢一ってどんなやつ？　やばそうなやつか？」

「……えっ？　あ、はい？」

　いきなり話を振られた僕は我に返って変な声をあげてしまう。

「藤島中将、また寝ぼけているのか。こんなこともあろうかと眠眠打破を秒間六十連射可能なマシンが」「いやいいです」またしても怪しげな機械をバックパックから取り出そうとした少佐を僕は押しとどめる。

「おい、実際に紫苑寺の連中に逢ってるのはナルミだけなんだからな。しっかりしろよ」

テツ先輩の言葉に僕は首をすくめる。

「そうなんですけど……」

「藤島くん、なにか気になることがあるの？」

「気になるっていうか」

僕は家系図をぼんやり見渡す。

「なんかもうぜんぜん現実感がなくて」

言ってしまってから後悔する。病院に居合わせた僕がそうなら、みんなにとっては輪を掛けてリアリティがないだろう。

でも、僕だって死人を見たわけではない。事件の後でアリスと話したわけでもない。なにもかも紙の上で起きていることとみたいに思える。そうだ、昨日別れたきり、アリスと一言も話していないのだ。顔も見ていない。アリスは今どうしているんだ？　遺産とか遺族とかどうでもいい。みんな犬にでも喰われればいい。それよりもアリスに逢いたい。あんな不気味な一族に囲まれて、今頃どんな思いをしているだろう。なにをされているんだろう？　犯してもいない罪を自白するようにさんざん苛まれているのか。ろくでもない想像が僕の手足に重たくまとわりついて、身動きもできない。アリスがいないとほんとうに僕は、なにを考えればいいのかさえ考えられない。

「アリスがいないと全然だめだね、藤島くん」
彩夏に言われて僕はぎくりとする。
「あ、ああ、……うん……」
僕はエアコンのせいで冷え切った腕を手のひらでこする。
「なにが起きてるのかもよくわかんないしさ、なにすればいいのかも」
弱々しい声しか出てこない。自分の言葉を自分で耳にしてさらに気力が萎えていく。
「まあ、それはおれたちも同じなんだけど」とヒロさんも沈んだ顔で言う。
「ボスが不在、というのははじめてのケースですからね……」少佐の声も暗い。
「アリスとは連絡とれねえの？　電話は？」
「何度かかけてますけどつながらないです」と僕は首を振った。「モバイルも持ってたはずなんでメールも出しましたけど返事がないです」
「んじゃ俺はひとまず警察に探り入れてみる」とテツ先輩は玄関に向かう。
「おれ、その病院にちょろっと行ってみるよ」とヒロさんも車の鍵をじゃらつかせて言う。
「自分もお供しましょう」少佐もヒロさんについて事務所を出ていった。
最後に残った彩夏が、申し訳なさそうに言う。

「あたしも、そろそろ仕込みに入らないと……あのっ、藤島くん、あたしにできることあったらすぐに言ってね」

僕は曖昧にうなずく。

「……ありがと」

じゃあっ、と元気な声を残して彩夏も部屋を出ていった。

僕はベッドの足下にへたり込んだ。なぜこんなに萎えきっているのだろう、と自分でも不思議に思う。探偵が不在で、いつも指示待ちだった助手が途方に暮れている——というだけじゃない。帰ってこないなら所在や理由を探りにいけばいいだけだ。テツ先輩もヒロさんも少佐もなんの迷いもなくそうした。でも僕は立ち上がれない。

アリスが、探してほしくないと思っているような気がするのだ。

自分自身を知ることを恐れていた、と言ったときの、彼女の顔に浮かんでいた悲愴な色を僕は忘れられない。あのときアリスはたぶん、すでに知りつつあったのだ。僕と離ればなれになることも彼女の頭脳なら予期できたはずだ。それでも彼女はなにも言わなかった。

僕に——関わってほしくなかったからじゃないのか。

✻

僕の予感はあたっていた。その日の夕方、帰宅すると、家のＰＣにメールが届いていた。アリスからだった。本文はなく、すさまじく重たいファイルが添付されている。クリックする手が震えていた。解凍してみると、動画ファイルだった。

『やあナルミ』

　画面の中で微笑むアリスは、昨日とはまたべつの、赤と白のドレスを着ている。たぶんＰＣのモニタ上部のカメラで撮影しているのだろう、机に向かっているらしいことがわかる。

『昨日はあんな騒ぎに巻き込んですまなかったね。これを見ているということは家には帰れたということだよね。螢にいさまはきみをどうしたのかは全然教えてくれなくてね。きみと直接話せればいいのだけれど、電話も許可されていないし、ネットも螢にいさまに貸し与えられたマシンでアクセスしているからあちこち制限だらけだ。こうして動画を送るのだけはようやく許してもらえた』

　僕は画面に顔を近づけ、アリスの背後に映っているものを舐めるように探る。白い壁、奥に金属製らしきドア、電灯のスイッチ——それくらいしか見えない。

『きみは螢にいさまにどこまで話を聞いているのかな。あの人は基本的に他人には全然興味がない人なのだけれど、きみのことはぼくに色々訊いてきたから、気に入られたということかな。ふふ、きみは奇妙な人間に好かれるたちだからね』

　アリスはそこでいったん言葉を切り、自分の広げた手のひらを見つめた。染み込んで消えたなにかの痕を探すように。

彼女は顔を上げ、いっそう儚げな笑みを浮かべて言う。
『昨日、父様が亡くなった。……ぼくが殺したんだ』
　僕は息を詰め、ノートPCの画面を両手でつかんだ。力を込めた親指のまわりで液晶が歪んで影がじわりと広がる。
『なぜそんなことをしたのか、きみは知りたいだろうね』
　僕は首を振る。アリスに見えるわけでもないのに、何度も強く。殺した？　自分の父親を、なぜ？　なぜかって？　そんなの知りたくない。どうでもいい。僕が知りたいのは、アリスが今どこでどうしているのか、どうして帰ってこないのか、それだけだ。
『さあ、説明してきみは理解してくれるだろうか。思えば、ぼくのこれまでの仕事の半分くらいは、ものわかりの悪い助手に事件を説明することだった気がするね。これが最後かと思うとせいせいする』
　最後？　アリス、なに言ってるんだ？　最後ってなんだ？
『ぼくは父様を楽にしてやりたかったし、自分も楽になりたかったんだ。他に方法はなかった。ものすごく簡単だったし、だれも苦しまなかった。もちろん、これからぼくはその代償を支払わなければいけないのだけれどね』
　だれも苦しんでない？　どこがだ。アリスは自由にさせてもらえてないじゃないか。昔みたいにまた閉じ込められてるんじゃないのか？

『事務所の後始末はてきとうにやっておいてくれたまえ。そのうち蛍にいさまが人を遣ってあれこれ運び出すだろうから、放っておいてもいいよ。空き缶とゴミだけはにおいが気になるだろうから捨ててくれたまえ。冷蔵庫のドクターペッパーも飲んでかまわない。退職金代わりというところだ。それとも彩夏あたりはとっくに飲んでしまっているかな？』

退職金ってどういうことだよ。なんで事務所の後始末なんて話が出てくるんだ？

動画を停めてしまおうかと何度も思った。こんなの見たくないし聞きたくもない。でも指が動かない。目をそらせない。

『きみはたぶん、ぼくの言葉を信じないだろうね。こんな動画、蛍にいさまの書いた台本通りに喋らされているだけだと疑うだろう』

唾液がぎりりと喉を軋ませて腹に落ちていく。その通りだ。紫苑寺の連中に犯人に仕立てあげられているんだろ？

『でもね、ぼくはあの病院に赴く前から、こうしようと決めていたんだよ。八年前の忘れ物を取りにいこう、と。自分の意志でやったんだ。これがぼくにできた、たったひとつの冴えたやりかただったんだ。その証拠は、リッリルゥの首のリボンに挟んであるよ』

僕ははっとして机の足下を見る。アリスから預かり、病院から持って帰ってきてそのまま置いてあるクマのぬいぐるみ。

『彼女のように、自分の生命まで始末してしまおうか、と考えなかったわけじゃない。でも、その必要もないかなと思っている。きみには二度と逢わないわけだからね、きみにとってのぼくは死ぬわけだ。さよならを言うということは少しだけ死ぬということだからね』

彼女ってだれのことだ？　自殺？　おまえなに言ってるんだよ？

『なにも難しい話じゃないよ。贖罪だ。ぼくは死者の代弁者の領分をこえてしまった。現実の刃で、現実のいのちを刈り取ってしまった。もう探偵ではいられない。だから――』

探偵ではいられない。

だから、探偵助手である僕とも、もう……

『それじゃあナルミ、他のみんなにも伝えておいてくれたまえ。もうぼくに一切関わらないようにと』

アリスはこちらに手を伸ばしてきた。一瞬、僕の手を取ろうとしているのかと思ってこちらも手を差し出してしまう。そんなわけはなかった。録画なのだ。彼女はキーを操作しただけだった。動画はぶっつりと切れた。

僕はしばらく呆けていた。

身体じゅうの気力をかき集め、リッリルゥを拾い上げる。クマの首に巻かれた赤いチェックのリボンの下を指で探ると、きつく折りたたまれた紙片が出てくる。

広げてみる。訳者あとがき、という文字がまず目に飛び込んでくる。文庫本から破りとったページらしい。読み進めていくうちに僕は息もできなくなる。翻訳者はこう記していた。原作者ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア――本名アリス・シェルドンは、アルツハイマーを患って病床にあった夫ハティントン・シェルドンを射殺し、自らも命を絶った、と……。

これは――ティプトリーの『たったひとつの冴えたやりかた』のあとがきだ。

アリスからの、最後のメッセージ。

病院のゲストルームにそんな本が都合良く置いてあるはずもない。探偵事務所を出る前に、すでに彼女はこのページを破りとってリボンの下に隠しておいたのだ。

僕はPCのモニタを見上げる。

指が無意識に動いて、「もう一度再生」のアイコンをクリックしている。画面に再びアリスの姿が現れる。

『やあナルミ――』

何度再生しても彼女の言葉は変わらない。事務的で、ソリッドで、真実の冷たい響きに充ち満ちている。

彼女は言う。

――こうしようと決めていたんだよ。

――八年前の忘れ物を取りにいこう、と。

——自分の意志でやったんだ。

うそだ。

うそだろ？

うそだって言えよアリス。もっと他のやりかたがいくらでもあったはずだろ。おまえ、こんな頭の悪いことするやつじゃないはずだ。映像のアリスに向かって僕は繰り返し無言で問いかける。返事も無慈悲なまでに同じ繰り返しだ。

——他に方法はなかった。

——ものすごく簡単だったし、だれも苦しまなかった。

人工呼吸器を外しただけ。すでに生ける屍だった男を、葬っただけ。薄暗い病室で、父親の喉元に向かって手を伸ばすアリスを、僕はありありと思い浮かべられる。

——自分の生命まで始末してしまおうか、と考えなかったわけじゃない。

——贖罪だ。

——もう探偵ではいられない。

どうして。

僕は文庫本のページを手のひらの中で握り潰す。

もう、どうしていいのかわからなかった。これまでどんなにわけのわからない事件に巻き込まれて混沌に呑まれかけても、アリスがいた。彼女の知性と論理が道しるべになってくれた。そのアリスがいない今、この事件がいったいなんなのか、だれが敵なのか、なにを掘り返して暴けばいいのか、わからない。

僕は最後に残った気力でメーラを起ち上げると、アリスからのメールを少佐に転送した。後はなにも言わなくても少佐がヒロさんやテツ先輩に見せて、そしてこれからなにをすべきか僕の代わりに考えてくれるだろう。

とにかく、疲れた。

僕は床を這っていってベッドに上がると、泥砂のような眠りの中に潜り込んだ。

✻

少佐からの返信は翌朝だった。

『とにかく「はなまる」に来るように。すでに平坂組にも召集をかけてある』

僕は寝ぼけ眼をこすってその文面を三度読み返した。平坂組。平坂組も動かしてくれてるのか。なんだか予想していたよりも対応が早い上に大々的だった。最初から全部あの三人に任せておけばよかったな。

僕よりもずっと探偵団としての活動歴が長いんだから、アリスがいない状況もなんとかしてくれるだろう。
なんとかする？　なにをどうするんだ？　だってそもそも、だれも困っていないし、助けを求めてもいないし、謎もなにひとつないんだぞ？
わからなかった。考えようとするとこめかみのあたりがぎりぎり痛んだ。僕は萎えた身体を引きずって浴室に行くと、うなだれて熱いシャワーを頭から浴びる。眠気も倦怠感もいっこうに洗い流せないのに、なにか大切な記憶だけは湯に混じってどんどん漏れ出ていくような気がして、長い間立ち上がれなかった。
家を出たのが十一時前だったので、『はなまる』に着いたときにはすでに開店時間だった。黒Tシャツの大男たちが二十人ほど、店の前に段ボールだのレジャーシートだのを敷いて座り、紙コップを手に騒いでいる。平坂組の連中だ。人数からしてフルメンバー。
「次俺いきます！　男磨かせてもらいぁす！　片手指立て伏せしながら大ジョッキ一気！」
「おいウェイトが足りねえぞ、だれか背中に乗れ」
「押忍！」
「三段重ねで！」
「重たいんスけど！」
「もっと飲め」

「飲めば重さなんて感じなくなるぞ！」
「潰れた」「潰れたな」
「二つの意味でな、ぶはははははは」
いくら袋小路で車通りがないとはいえ、路上でなにやってんだこいつら。近所迷惑もいいとこだ。
「おいてめえら、もうちっと静かに飲まねえとまとめて警察突き出すぞ！」
店の厨房からミンさんが麺の湯切りをしながら怒鳴る。
入り口すぐ前のビールケースの席には、テツ先輩、少佐、ヒロさんと一緒に四代目の姿まである。ファー付きのモッズコートにぴったりと身を包み、難しそうな顔でペットボトルの烏龍茶を飲みながら先輩となにか話している。店内には常連客のおっさんたちも何人かいて、みんな赤ら顔だ。
「あっ、兄貴！」「兄貴、お疲れさんス！」
自転車から降りる前に黒Tシャツどもに見つけられてしまった。だいぶ離れているのにすでに酒臭い。そのままサドルにまたがり直してUターンしたくなったが、ゴリラどもがわらわらと駆け寄ってくるのでそれもできなくなる。
「兄貴、駆けつけ参拝お願いしぁす！」
どこの神社に駆けつけたんだよ。駆けつけ三杯でしょ？　飲まないけどさ。
「バケツで三杯だろ」「すげえ酒量！　さすが兄貴」死ぬわ。やめてくれ。

「可決で万歳だろ」「法案が成立すると嬉しいもんな！」なんでいきなり政治意識高いの。
「ナベツネ漫才だろ」「だれがつっこむんだ」「もちろん兄貴だ」「巨人軍も恐れないなんて、さすが兄貴！」
「ナベツネがボケとかべつの意味で読売に叱られるからやめてください！」
　じゃなくて。コントにつきあってる場合じゃなかった。
「え、ええと、あの、なんで酒盛りやってるんですか？　事件のことで集まったんじゃ」
「へ？　事件？」電柱が目をぱちくりさせる。
「花見っスよ、花見酒！」岩男が紙コップを高く持ち上げた。
　……花見？
　振り返ると、なるほど、路地の出口から公園の桜並木が遠く見え、七分咲きの花が陽射しを透かして美しく燃えている。
　もうそんな季節か。ここ数日色々ありすぎて季節になんて心を向ける余裕もなかったけれど、そういえば昨日から四月なんだっけ。
「昔は公園で花見してたんスけど」と電柱がだいぶ酔っ払った顔で言う。「ほら、去年、スポーツパークに改装されちったじゃないスか。それでやりづらくなって、今年は『はなまる』でやることにしたんス」
「どうせ花なんて見ないしな」「食って飲むだけだしな」「マスター、この桜のアイスクリームまじ美味いっス、おかわりもらえますか！」

「人数分しかねえよ、季節限定品なんだから！」
ミンさんの怒声が厨房から返ってくる。
僕は自転車を店の勝手口前に押し込み、四代目たちの座におそるおそる近づく。
「あのう、これは……なんなんでしょう？」
「花見だ」と四代目は部下たちを横目で冷たくにらんで言う。
「例の動画は少佐から回ってきた。事情もだいたい聞いてる。うちの馬鹿どもにはまだ知らせてないが」
「いや、それはわかったんですが、そのう」
「そ、そうなんですか、だったら、その、こんなことしてる場合じゃ」
「アリスがいなくても花は咲くんだよ」とテツ先輩が浮かれた声で口を挟んでくる。足下にはすでに空になった日本酒の四合瓶が転がっている。
「そうそう。飲まなきゃやってられないよね」
ヒロさんもコップを傾けている。中身の液体は色からしてウィスキーだ。この人は飲んでもまったく顔色が変わらないのだが、目がいくぶんとろんとしているのでかなり酔っているらしいとわかる。
「きっさまっとおーれーとーはぁ、同期の桜ぁ」
少佐はべろべろになって軍歌を歌っている。なんなんだこの集まりは。
「あの、……アリスのことで話し合うんじゃないんですか」

「なにをだ」と四代目（よんだいめ）が素っ気（そっけ）なく言う。「一切（いっさい）関わるなって言ってたじゃねえか」

「い、いや、でも」

「正直に言うとね、どうすればいいかわかんないんだよ」

　ヒロさんの言葉に僕ははっとする。

「アリスがただとっ捕（つか）まったってだけなら、それこそ組のみんなにカチ込んでもらってでも取り返すけどさ。
あんなの見せられたらさ……」

「助けに――いかないんですか」

「あのな、ナルミ」テツ先輩が据わった目で言う。「アリスがほんとうに殺ったんだとしたら、実家から連れ出すとかえって話がまずくなる可能性がある。わかるだろ。あいつらは警察沙汰にしないようにって隠してんだ。でも俺らが突っ込んで引っかき回したら警察も動いて病院の事件も表に出ちまうかもしれない」

先輩の言葉はゆっくり時間をかけて、かちこちになった僕の脳味噌に染み込んでくる。

アリスは今のままでいい。困っていないから。
困っていないやつは、助けられない。
いや、むしろ――助け出して再会できたとしたら、ほんとうにアリスは自らの生命を絶つかもしれない。僕に二度と逢わないことが、彼女にとっては死の代替なのだから。その想像に僕は悪寒をおぼえる。あいつがまさかそんな馬鹿なことをするわけがない、と何度言い聞かせても無駄だった。もうすでにじゅうぶん馬鹿なことをしているからだ。
「靖国で逢おう！　靖国でな！」
すっかりできあがった少佐は、だれもいない空間に向かって縁起でもないことをわめいている。事情をわかっていないおっさんや黒Tシャツが一緒に盛り上がる。
「……でも、だからってなんでこんなときに花見なんて」
僕は弱々しい声で訊ねる。
「こんなときだから」とヒロさんは淡く笑った。「どうしようもないときは笑うんだよ。楽しいことする。みんなで暗い顔してたってなんにもならないからさ」
目を伏せ、首を振る。そんなにしたたかにはなれない。飲み物を差し出されても受け取る気にもなれない。
勝手口の自転車のところに戻ると、かごに入れてあったリッリルゥを抱えて非常階段をのぼった。事務所に返したら、さっさと帰って寝よう。

「おい、園芸部」
　踊り場まで来たところで下から声をかけられた。振り向くと、四代目が階段をのぼってくるところだった。僕は足を止めて身を固くする。
「す、すみません」
「なにがだ」と四代目は眉根を寄せる。
「い、いや、なんか怒られるんじゃないかと思って」
「アホか」
　四代目は僕が小脇に抱えていたクマを指さす。
「ほつれてる」
「え？」
「鼻のボタンがほつれてとれかけてる。貸せ」
　ぬいぐるみを僕から奪い取ると、四代目は三段飛ばしで階段を上がりきり、探偵事務所に入ってしまった。あわてて追いかける。
　玄関に腰を下ろした四代目はコートのポケットから手のひら大の黒いプラスティックケースを取り出した。開けると中には針と鋏と糸巻きが入っている。裁縫用具だ。いつも携帯してたのか。
　外れかけていたクマの鼻を器用に繕う四代目の隣に、僕はしゃがみ込んだ。

修繕を終えた四代目は、リボンのずれを直し、それからクマの琥珀色の両眼をじっと見つめ返した。ひょっとしてあの動画でアリスが言っていた『証拠』のことについて訊かれるのではないかと思ったけれど、四代目は無言でリッリルゥを僕の膝に突き返してきた。

「……あいつには貸しがたくさんある」

四代目は息をついてつぶやいた。

「だが借りも同じくらいあるからな」

差し引きゼロ。いなくなってもべつにかまわない。そういうことだろうか。僕はぬいぐるみを腹に抱えて、立てた膝に額を押しつける。

「おまえ、だれかが決めてくれると思ってあの動画を少佐に送ったんだろ」

四代目の口調は僕を責めるわけでも嗤うわけでもなく、ただ淡々と事実を指摘するだけのものだった。

「……はい」

「おまえの問題なんだから甘ったれんな。おまえが手伝えって言うなら状況と頼み方次第じゃ手を貸す。俺も、テツたちも。でも決めるのはおまえだ」

僕は四代目の横顔をぼんやり見つめ、二、三度瞬きする。いつも僕の背中を蹴飛ばしてくれていた、凛とした冷たさと強さ。

「僕の……？　いや、あの、……アリスの問題だから、みんなの問題ですよね」

四代目は立ち上がった。

「アリスの問題でもないし俺たちの問題でもねえよ。おまえの、だ」

一瞥さえも残さず、四代目は事務所を出ていった。僕は冷房かけっぱなしの乾ききった空気の中にひとりきりになる。リッリルゥが心配そうに僕を見ている。

なぜ、他のだれでもなく僕の問題なのだろう。あまりにもアリスに対して冷たくないだろうか。いや、あの人は昔からあんなだったか。

甘ったれている。

たしかに、そうなのだろう。アリスがいなくなってから、僕はおろおろと責任逃れしてばかりだ。自分で動くのが怖いからだ。

頭を振って立ち上がり、靴を脱いでリッリルゥを仲間たちのところに連れていく。それから浴室に干してあった数着のパジャマを外して畳んだ。アリスの残滓がそこかしこに淀んでいるこの部屋は、どこを見ても、なにに触れても、ふうわりと甘い痛みが歯の奥あたりからにじみ出てくる。

ふとアリスが言っていたことを思い出して、パジャマの柄や色を見比べてみる。なるほど、クマの模様も、生地の水色の味も、どれも少しずつちがっている。タグを見ると、どれも菊の花みたいなマークがプリントされていた。彼女が言っていた通り、全部同じブランドなのだ。それなら気づかなくてもしょうがない。……と言い訳してみても、なんのなぐさめにもならない。こんなことにも気づかなかった。一年と半分も助手づらして隣にいたのに、僕はアリスのことをなにも知らなかったのだ。

今回のことだって、彼女は事前になにひとつ話してくれなかった。相談されたところで僕にはなにも言えなかっただろうけれど。

一年半も、ここで僕はなにをやっていたんだろう。

アリスに何度も救われた。たくさんのことを学んだ。打ちのめされるたびに彼女の言葉でなんとか立ち上がれた。でも、僕の方からアリスにはなにひとつ返せなかった。間の抜けた質問をしたり、無謀に突っかかっていって心配させたり、自転車の二人乗りで怖がらせたり、気の抜けたドクターペッパーを出して叱られたり、つまらないことばかりしていた。なにが探偵助手だ。笑えもしない。

もう一切関わるな。

探偵から愚昧な助手への、最後の指令。

涙が出そうになってくる。そうだな、アリス。それなら、こんな馬鹿な僕にも簡単に遂行できそうだよ。

探偵事務所を出た。階下ではまだ平坂組メンバーたちのはしゃいだ声が聞こえていた。アリスがいなくても花は咲く。僕は春の訪れを激しく憎んだ。

✽

帰宅してからすぐにベッドに潜り込んだ。むちゃくちゃな睡眠サイクルだったのでさすがに眠れないだろう、少し横になってぼんやりするだけ――というつもりだったのだけれど、起きてみたらあたりは真っ暗だった。枕元の携帯を見ると午後七時。姉からメールが来ていた。残業で遅くなるので夕食はてきとうに済ませておいて。

階下でなにか物音がした。それで目が醒めたらしい。姉が帰ってきていないということは、あれは親父か。僕はベッドの上でぐったりとうなだれたままため息をつく。ここ最近、頻繁に帰宅するようになった。頻繁といっても、前は二月に一度くらいだったのが、月に二、三度に増えただけなのだけれど。

一つ屋根の下に父親と二人、という状況が僕をさらに憂鬱にさせる。また寝てしまおう、と毛布をかぶるが、急に目が冴えてきて無理だった。

あきらめてベッドから下りる。

肌が汗でべたべたしたので服を脱いだ。自分が触れたなにもかもが、油と泥にまみれて汚れているような気がした。引き出しからてきとうに服を引っぱり出すと、茉梨さんにもらったTシャツだった。

そういえばあの人はどうしているだろう。妹が父を殺したと知ってとっさに嘘をついてかばったらしいけれど、けっきょく無駄だったわけだ。今もアリスのそばについているのだろうか。いや、アリスは茉梨さんを嫌っていたから――

ふと、僕はそれに気づく。

Tシャツの襟に縫い付けられているタグだ。プリントされた菊の花のようなエンブレムに見憶えがあるのだ。ブランド名はちがうけれど、アリスのパジャマのタグに描かれていたものと同じだ。

僕は机に飛びついてノートPCを開いた。起動時のログインパスワード入力ももどかしかった。紫苑寺茉梨の名で検索すると、公式サイトがトップに出てくる。ページを開くと、純白のワンピース姿で窓辺にたたずむ茉梨さんの画像の下に、三つのブランド名が並べて表示される。女性向け、男性向け、そして子供向けブランド。そのエンブレムはすべて菊の花だ。

どうして今まで気づかなかったんだろう。

僕は呆然として、焦点の合わない目をモニタ表面にさまよわせる。

アリスのパジャマはみんな茉梨さんのブランドのものだった。それなのに僕は言葉のうわべだけ受け取って、見えていなかった。姉を疎ましがるアリスの態度を本心からのものだと思い込んでいた。馬鹿だ。なんにもわかっていなかった。

あの二人は、あんなにも想い合っていたというのに。

ほんとうに僕は、すぐそばにずっといたくせに、アリスのことをなにも見ていなかったのだ。助手でいる資格なんてない。

僕が見落としていたこと——

事件の夜のできごとがひとつひとつ脳裏によみがえってくる。細やかに、鮮やかに。

僕は立ち上がった。背後で椅子が倒れたのにもほとんど気づかなかった。色彩と言葉が渦を巻き、ちぎれ、ばらばらに散り、再び融け合う。

熱い息のひとかけらが僕の唇から漏れた。

心臓が静かに、力強く、リズムを拍っている。

わかった。

あの夜、なにがあったのかがわかった。なにもかもがあまりにも明白だった。啓示はいくつもあった。ひとつ残らず僕の目の前に晒されていた。ただ愚かな僕が目を閉じていただけだ。

Tシャツに袖を通し、携帯電話を握りしめ、息をついて動悸を落ち着かせる。

ただひとつ、まだわからないことがある。彼女がなぜそうしたのか、だ。でもそれは後でいい。今は動くことだ。立ち止まらないで、縮こまらないで、顔を上げて、どこかに向かって歩き出すこと。

どこに？

僕は部屋を出た。階段を下りきったところで、暗い廊下の人影に気づく。居間の戸口からの明かりを背にして父が立っている。ちょうどトイレから戻ってきたところだったのだろう、排水音が遠く聞こえている。

僕と父の視線は暗がりですれちがう。そのまま父は僕に背を向け、居間のドアのノブに手をかける。僕も気まずさを嚙み殺して無言で玄関に向かおうとして、足を止める。爪先で廊下の床が軋む。

胸に刺さったままのいくつもの言葉が、今また熱を帯びて、僕の心臓を掻きむしる。

これは僕の問題なのだ。僕が目を閉じていただけだからだ。

振り向き、閉じかけたドアの隙間（すきま）に見える頼りない背中に声をかける。

「──父（とう）さん」

父はドアを引いていた手を止めた。顔はあちらに向けたままなので、表情はわからない。いつの間にかこんなに白いものが増えていたのか、と僕は父の後ろ髪（がみ）を見つめて思う。どれだけ現実から目をそらして心の中だけで時間を巻き戻したところで、肉体に嘘（うそ）はつけない。

「姉貴（あねき）からメールあって、今日（きょう）は残業（ざんぎょう）で遅くなるって。……僕も、これから出かけるから。夕食はてきとうに済ませて、って」

返事はなかった。父はドアの最後の数センチの隙間を残したまま固まっていた。そのまま老いさらばえて砂になって風に衝（つ）かれて崩（くず）れてしまうんじゃないかと思った。僕はあきらめて踵（きびす）を返し、玄関に腰を下ろして靴（くつ）を履（は）こうとした。

「──鳴海（なるみ）」

声がした。

それが父の声であるということも、自分の名前を呼ばれたのだということも、理解するのにひどく長い時間がかかった。振り向くとドアの隙間に父の横顔（よこがお）が見えた。長い嘘の年月によって刻みつけられた皺（しわ）だらけの老いた顔が。

「おまえは夕食どうするんだ」

僕はいくつもの形にならない答えを口の中で噛(か)みしめた。

「外で食べてくるよ。よく行ってるラーメン屋があるんだ」

けっきょく、それだけ言えた。

「……そうか」

素(そ)っ気(け)ない父の答えを、ドアの閉まる音が無愛想(ぶあいそう)に断ち切った。

家を出ると、薫(かお)り高い夜風が僕の髪を梳(す)いた。暗いのに肌寒(はださむ)さは感じない。揺れる庭木(にわき)の梢(こずえ)の間に遠くの摩天楼(まてんろう)の明かりが見える。猫(ねこ)の争う声がどこかで聞こえる。夏を待ちきれない虫の声もかすかに流れてくる。空気はいのちのにおいで満ちている。萌(も)え出てくるものと爛(ただ)れて腐(くさ)り落ちていくものがまじりあう、春のにおい。

道を歩き出しながらポケットから携帯(けいたい)を取り出す。だれにかけるべきか少し迷ってから、けっきょく四(よん)代目(だいめ)の番号を呼び出す。

『……なんだ』

無愛想(ぶあいそ)な声がすぐに返ってくる。その後ろで、大勢(おおぜい)のがやつく声がする。

「……あー、あの、ひょっとしてまだ飲んでるんですか」

『四軒目(よんけんめ)だ。桜丘町(さくらおかちょう)の飲み屋にいる』

野太い調子っぱずれの合唱まで聞こえてくるところからして、平坂組メンバーもみんなそろっているのだろう。

「ええと。お願いがあって」

『早く言え』

　僕が深呼吸して気合いを入れ直そうとしたとき、電話の向こうでグラスがぶつかったりなにか大きなものが倒れたりする音が響いた。僕はびっくりして携帯を耳から離す。

『おいテツてめえ』という四代目の声を遮って先輩の酒焼けした声が耳に刺さる。『おいナルミか？　なんだよけっきょく四代目にかけるのかよ！　真っ先に俺だろ！』

　少佐の声も重なる。同じ軍人として自分に最初に連絡するのが筋だろう！　ヒロさんもいくぶんあやしい声で言う。おれ一応ナルミ君の兄弟子なんだからまず相談すべきじゃない？　あんたらはどうせそんなふうに酔っ払ってるだろうから四代目にしたんだよ。

『アホどもは気にせずにさっさと言え』

　どうやら電話を奪い返したらしい四代目がまた言った。酔っ払いどもに気勢を削がれた僕は深呼吸からやり直しだった。

「……アリスを実家のやつらから取り返します。手伝ってください」

『支払いは』

まず金の心配をするあたりがさすが四代目だった。こういうさばけっぷりはほんとうにありがたい。ほんの十分くらい前までぐじぐじ悩んでいた自分を顧みずに済む。

「戻ってきたアリスが払いますよ」

『あいつは関わるなって言ってたじゃねえか。助けてほしいなんて思ってないってことだ。戻ってきても払わないかもしれない』

「払わせますよ。今どう思っていたって関係ないです。連れ戻した後で必ず、ありがとうって言わせますから」

そう、アリスの問題ではないのだ。ましてや四代目とかテツ先輩とかヒロさんとか少佐の問題でもない。僕がどうしたいか、の問題だ。

僕は——アリスに戻ってきてほしい。

このまま二度と逢えないなんて、ぜったいにいやだ。一切関わるなとか、勝手に言わせておけばいい。ほんとうに関わってほしくないなら、なにも言わずに消えればよかったのだ。よりによって僕宛にメッセージを送ってくるなんて、馬鹿なやつだ。しがみついてなりふりかまわず引きずり戻してやる。これまで嘘と詭弁で何人もだましてきた。でも自分の心にだけは嘘をつけない。

僕はアリスと離れたくない。

『やけに自信ありげだな。どうせおまえから取り立てるから、アリスがどう考えてようと俺にはどうでもいいんだが』と四代目は素っ気なく言う。『連れ戻した後のことは考えてるのか。あいつのやったことが表

沙汰(ざた)になったら——』

「アリスは殺してません」

だいぶ長い沈黙(ちんもく)があった。四代目だって言葉に迷うことくらいあるのだ。

『——そうか。ならいい』

なにも訊(き)いてこなかった。ほんとうにありがたかった。この人が義兄(あに)でいてくれてよかった、と思う。

『組事務所で待ってろ。俺たちもすぐ行く』

電話は切れた。僕は携帯(けいたい)をポケットに押し込んでまた歩き出す。まず『はなまる』に置きっぱなしの自転車を取りにいかなきゃな、と思う。昼間、事務所から出るとき、みんなと顔を合わせるのが気まずくて乗り捨ててきてしまったのだ。アリスを取り戻すこと、みんなに手伝ってもらうことをあのときに決めていれば話は早かったのに。

いや——回り道が僕の人生なのだ。これまでだってそうだったじゃないか。後悔(こうかい)なんて墓(はか)に入ってからすればいい。

今は、とにかく走り出すときだ。

文京区と豊島区の境あたりにある、大通りに面した真新しい十階建てのオフィスビルだった。長い四角錐のてっぺんを切り落としたような前衛的な造りで、ガラス張りの壁面が春の陽を無造作に照り返している。玄関口にはテナント募集中の看板が立てられていた。

　僕は手でひさしをつくってまぶしい陽射しを遮りながらビルを見上げる。

『アリスの居場所はわかっている』

　昨日、平坂組の事務所に集まっての作戦会議で少佐がいきなり言った。

『送られてきた動画の後ろの音声を解析したんだ。駅の発着メロディがかすかに入っていたから特定は楽だった』

　楽だった、とさらりと言えるところがすごい。

『少佐があたりをつけた場所を調べてみたら、紫苑寺グループの傘下不動産会社が持ってる新築ビルが建ってた』とテツ先輩が引き継いで言う。『だいぶ広くて新しい部屋みたいだったからまず間違いねえだろ』

僕が落ち込んで時間を浪費している間に、みんなはアリスにすぐ手が届くところまでとっくに進んでいたわけだ。毎度のこととはいえ、情けなくなってくる。
下調べは僕にやらせてください、と申し出たのは、自分のふがいなさの埋め合わせのためでもあった。
十分くらいかけてビルのまわりをゆっくり一周しながら、各フロアの窓や、表と裏それぞれの入り口や、地下駐車場などの設備を観察する。ここからがたいへんだ。ほんとうにアリスがこのビルにいるのか、何階のどの部屋に監禁されているのか、どんな状況に置かれているのか。詳しく調べ上げて作戦を立てなきゃいけない。
焦ってもしょうがない。今回はまず、ビルの中に入る口実をどう作るかの目処を立てるための下調べだ。エントランスに近づき、各階の案内板を携帯で撮る。入居している会社も重要な情報だ。新築だからか、ほとんどのフロアは未入居だった。これなら空き部屋もさぞかし多いはずで、人ひとりを秘密裡に監禁するのに向いているかも——
「もう来たんですか。なかなか早かったですね」
声がして僕は跳び上がった。
振り向くと、自動ドアが開いて白衣姿が出てくるところだった。紫苑寺螢一だ。
「あ、あ……」

いきなり鉢合わせするなんて思っていなかった。まったく心の準備ができていなかった僕はうろたえて後ずさる。
この男がいるということは、やっぱりこのビルがアリスの閉じ込められている場所なのか。どうしよう、せっかく少佐やテツ先輩が見つけてくれたのに、こんなにあっさりとこちらの動きをばらしてしまった、これじゃアリスを他の場所に移されてしまう。そんな考えが脳を巡って後頭部が過熱する。けれど紫苑寺螢一は小首を傾げて言った。
「ああ、ここには有子はいません」
僕は唾を飲み込み、彼の顔を見つめ返す。
「動画の背景音を解析して駅の発着音からこの場所を割り出したんでしょう？」
「……え……あ……」
「それくらいのことができる技術力はある、と聞いてはいましたが、実際に確かめたかったので、動画にダミー音声をミックスしたんです。わずか二日でたどり着くなんてなかなか大したものですね」
唖然とする。言葉がなにも出てこない。
動画に偽の音声をミックスした？　僕らの技術力を測るために……？
「しかし、有子は君に関わるなと言ったはずですが」

骨の軋みが聞こえてくるくらい拳を固め、爪を皮膚に食い込ませる。落ち着け。今は驚いたり度を失ったりしているときじゃない。僕らは引っかけられてこうして見事に釣り出されて手の内をさらしてしまった、その反省は後だ。

「アリスをどうするつもりですか」

僕は声の震えをなるべく抑えて訊ねた。

「君に教えるようなことではないでしょう」

「僕はあの夜、病院でなにがあったか知ってるんですよ。警察とかマスコミにぶちまけることだってできます」

紫苑寺螢一は細く息をついた。

「中で話しましょう。玄関口でする話ではありません」

彼に続いて僕はエントランスに入った。受付にもエレベーターホールにも人の姿はなかった。竣工したばかりのビルのきついにおいが漂っていた。一階のロビー隅、パーティションで区切られたソファセットに通される。

「話す前にひとつ要求したいことがあります」

ソファに座るなり紫苑寺螢一は言った。

「……なんですか」

「そのポケットの中のレコーダーの電源を切ってください」
驚きが顔に出ないようにするのは無理だった。僕はハーフコートの胸ポケットのふくらみにそっと手をやった。
「べつに君のように異常な鋭敏感覚を持っているわけじゃありませんよ。偵察に来たわけだから当然、音声も録っているでしょう」
僕は唇を嚙み、ポケットから手のひら大のICレコーダーを取り出してテーブルに置いた。
「携帯もです」と紫苑寺螢一が即座に言うので、携帯電話もレコーダーの隣に並べる。
吐き気がするくらい厄介な相手だった。これまで、探偵助手として様々な事件に関わり、色んな連中と敵対してきたけれど、紫苑寺螢一はその中でも間違いなく最もいやな敵だった。これだけ僕らの手の内を見抜き、手のひらの上でもてあそびながら、そもそも敵意がないという点がますます危険だった。
こんな男のもとから、アリスを取り返さなきゃいけないのだ。そして最初の一手が今さっそく鼻で笑われ、叩き潰されたところだ。
レコーダーも携帯も電源が切れていることを確認してから、紫苑寺螢一は話し出した。
「まず、君はあの夜になにがあったのかについて証拠をなにも持っていませんね」
僕はうなずきもせず反駁もせず彼の言葉を黙って聞いていた。
「付け加えるなら、我々は火消しをするだけの力があります」

警察もマスコミも黙らせられる。紫苑寺家にはそれだけの財力と権力がある。そんなことは僕にもわかっている。

「しかし、それなりのコストはかかります。そういう点で、君の脅迫は交渉材料としては悪くない。安い情報なら提供しましょう」

なんでいちいちほめてくるのだろう。この男と話していると、耳の穴から掃除機で精神力を吸い出されているような気分になる。

「有子をどうするつもりなのか、でしたね」と紫苑寺螢一は脚を組み替える。「どうもしません。強いて言うならば、観察して、感動します」

僕はため息をついた。まったく意味がわからなかった。ムカデやサソリを相手に量子力学について話し合っている方がまだしも建設的に思えた。

「有子は特別な人間です。存在自体が奇蹟といっていい。それはわかりますね？」

「いや、わかりませんけど」

わざと間の抜けた答えを返してみたが、紫苑寺螢一は無視して続けた。

「あれほどの煌めきと渇望を持つ知性に私はこれまで逢ったことがありません。全宇宙さえも呑み込める、と私は直観しました。だからマシンを与えたんです。君は私が彼女の教師なのだと思っているかもし

れませんが、あの技術はほとんど独学です。私はただカーテンを開いて空がそこに広がっていることを教えただけです」
　僕は押し黙って、眼鏡の奥の無機質な両眼を見据える。それでなにが言いたいんだ？
「これまでも、有子の育っていくさまを見守ってきました。あの子のシステムに侵入を図るだけで成長ぶりが見て取れました。しかし、身近に置いてコーディングやセットアップまで含めて観察できるならなおいい。これからはより細やかに感動できます」
　不気味とか不可解とかそういうありきたりの否定的な三字熟語では表現できない異様なものを僕は紫苑寺螢一という男から感じた。嫌悪感ですらなかった。ちょうど、ある種の深海生物を見て美しいと思うのに似ていた。
　しかし、感じ入っている場合ではなかった。アリスが今どこでどうしているのか、探り出さなきゃいけない。なんとか質問をねじ込める糸口を見つけ、僕は口を開く。
「アリスはあなたの監視下にあるってことですか」
「もちろんです」
「解放してください」
　紫苑寺螢一はかすかに首を傾げた。

「その要求は先ほどの些細な脅迫にはまるで釣り合っていません。身の程を知らないのは君の美点でもありますが、限度は自覚するべきです」
ほんとうになんなんだこいつは、と僕は苛立つ。なんでそんな家庭教師みたいな口調でほめたり諭したりしてくるんだ？
「それともうひとつ。私は有子を拘束しているわけではありません」
僕は彼の口元をにらみ据える。言葉の継ぎ目から染み出るものを見極めるように。
「匿っているんです。部屋にはもちろんロックが施してありますが、それはむしろ外から開けられないように、です。会長は奇蹟的に一命を取り留めましたが、先は長くないでしょう。この状況で、有子は非常に危うい立場にあります。特に私の祖父は、有子に永遠に沈黙していてほしいと思っている。なにをするかわからない」
「あなたのお祖父さん？」
僕は首を傾げる。彼の祖父は、会長の弟の紫苑寺幹嗣。今や遺産をすべて相続できる立場のはずだ。
「アリスになにをしようっていうんですか？　だって遺産はもう全部もらえることがきまったんでしょう？」
紫苑寺螢一は口をつぐみ、かなり長い間じっと黙り込んでいた。たぶん、情報をどこまで与えていいものか考えていたのだろう。僕が不安をおぼえ始めた頃、ようやく口を開く。

「あの夜、死んだばかりの光紀さんのベッドの脇に、ある書類が出しっぱなしになっていました。真っ先に駆けつけた祖父が処分しましたが、犯人がそれを見たのは確実です」

「なんの書類ですか？」

「知らない方がいい。君だって始末されたくはないでしょう。有子はその、知らない方がいい事実を知ってしまった、ということです」

「始末、って……いったいなんなんですか、なんの話をしてるんですか？」

　紫苑寺螢一は目を伏せてほとんどささやくように言った。

「君は紫苑寺の狂気をまだわかっていない。その方が幸せですが」

　紫苑寺の狂気。遺産相続に関して、まだ僕の知らないなにかがあるのか。

いや――考えていたってしょうがない。こいつは喋らないと決めたことは絶対に喋らない人間だ。それより今はとにかくアリスの状況を知ることだ。

「アリスをお祖父さんから守ってるって言いたいんですか。閉じ込めてることにかかわりないでしょう」

「有子にはあの探偵事務所にいた頃とほぼ同じ通信・開発環境を与えています。その気になれば私の敷いた防壁をクラックして君に連絡し、居場所を知らせることもできる。部屋のロックを外して出ていくことも、です」

　僕は唇を噛みしめる。

その気がないから、戻ってこない。自分の意志で檻の中にいる。

あんたのクラッカーとしての技術はアリスより上じゃないか。その気はあるのに突破できていないだけかもしれないだろ。とは思うが、言ってもしょうがない。もっと他に訊くべきことはいくらでもある。

「……茉梨さんはどうしているんですか？　あれからまったく連絡が取れないんですが、茉梨さんにもなにかしたんですか」

「茉梨さんは病院にずっと滞在して、会長を看ています。あの人も有子と同じく会長のお気に入りでしたからね」

あのまま病院にずっと留め置かれている？

「それは病院に閉じ込めてるってことじゃないんですか」

紫苑寺螢一はわずかに肩をすくめた。

「そう表現しても差し支えないでしょう。表向きは彼女も体調を崩して入院したということになっています。有子とちがって社会的立場もあり、多忙ですから」

じゃあアリスが囚われたままでいるのは姉を人質にとられているからじゃないのか、と僕は思うが、口には出さない。

「……そうやってひた隠しにして、アリスのお父さんが死んだことはどう始末をつけるつもりなんですか」

「そこは君の知ったことではありません」

さすがにここは喋らないか。違法行為に関わる部分だからな。脅迫のタネが増えてしまう。でもだいたい見当はつく。病院側のミスということで済ませるのだろう。

もう少しだけ揺さぶってみよう、と僕は思う。

「アリスは殺してません」

紫苑寺螢一の表情はまったく変わらなかった。

「だからどうしたんですか？」

馬鹿にしている口調ではなかった。ほんとうに、殺していないからどうしたのかと疑問に思っているのだ。

「殺していようと殺していまいと、私にはどうでもいいことです。有子が私の手元に留まる理由になるのなら嘘でも妄想でもかまわない」

僕は口をつぐみ、立ち上がった。もう話すことはなさそうだった。ところがビルの玄関に向かいかけた僕を紫苑寺螢一が背後から呼び止める。

「なんですか」と僕は足を止めて振り向いた。

「有子は普段なにを食べていたんですか？」

「……は？」

変な声が出てしまった。いきなり卑近な質問をされて軽い目まいがした。

「調べでは、ドクターペッパーと、麺（めん）や肉抜きのラーメン。味もあの『はなまる』という店のものを再現させましたが、一口も食べません」

　僕は目をしばたたく。

「……はあ。もともとあいつは小食（しょうしょく）ですけど」

「もう三日目です。水分もまったく摂（と）っていません」

　ドクターペッパーすらも飲んでいない？　それはおかしい。

「かなり衰弱（すいじゃく）しています。元来、虚弱（きょじゃく）な身体（からだ）ですが……」

　僕は息を呑（の）んで紫苑寺螢一に詰め寄った。

「医者（いしゃ）はなにをやってるんですか！」

「点滴（てんてき）も拒否するんです。それとも指（ゆび）一本動かせないくらい拘束（こうそく）しろとでも？」

「い、いや、だからって……なんでですか？　水も飲まない？」

「あるいは、贖罪（しょくざい）というのはそれのことかもしれません。君に宛（あ）てた動画（どうが）でそのようなことを言っていましたね」

　緩慢（かんまん）な——自殺？

　気づくと僕は紫苑寺螢一の白衣（はくい）の襟（えり）を強くつかんでねじり上げている。

「今すぐアリスを返してください！」

眼鏡の奥で憐れみに満ちた両眼が細められる。
「何度も言わせないように。君は要求できる立場ではありません」
「アリスが死んでもいいんですかッ」
「はい」
「……な——」
紫苑寺螢一は僕の腕を払いのける。
「死を選ぶというのなら、それもまた有子の美しい生の一部です」
絶句する。怒りさえもしばしば形にならず揮発してしまう。
「だいいち解放したところで彼女がちがう選択をするわけでもない。枯れて散っていくさまも、私はこの目で見届けます」
狂っている。頭がおかしい。そしてある意味ではアリスと同類だ。僕は紫苑寺螢一の身体をソファに突き飛ばすと、玄関に向かって走り出した。煮えた脳味噌がどろどろと耳の穴からこぼれ出ていきそうだった。

✻

その日の夜、『はなまる』勝手口前での作戦会議中、少佐はずっと落ち込んでぶつぶつ言い続けており、まるで役に立たなかった。
「偽装音声だった、だと……」
盗聴やその分析は、知り合いに自衛隊のソナー手もいる少佐にとっては大の得意分野だったので、一杯食わされたのが大ショックだったらしい。
しかしそんなのは気にしていられない。僕とテツ先輩とヒロさんは固い表情で木台をにらみ、どうやってアリスを奪い返すかを話し合った。
「とにかく時間がねえ。押し入るか脅すか、どっちかだな」
先輩が低い声で言う。僕もうなずいた。もうなりふりかまっていられなかった。
「話を聞く限りじゃ、アリスを監禁してるのはその螢一ってやつの独断なのかな」
ヒロさんが神経質そうに膝頭を指でとんとんと叩きながら言う。
「たぶんそうです。一族の他の人間から匿ってる、みたいなことを言ってましたから」
僕の答えを聞いて先輩は腕組みして唸る。
「それならまだしも監禁場所が絞り込めるが……そいつ自身もＩＴ社長で大金持ちだろ。どこにビル持ってるかわかったもんじゃねえ」

「紫苑寺螢一はアリスにご執心の変態なんだろ。間近で観察したいって言ってんだから近場にきまってるよ」とヒロさんが指摘する。
「それもそうか。ひねりもなにもなく、自宅か自社オフィスかもしれねえな。じゃあ、不動産屋の情報網あたってみっか」
　立ち上がった先輩は、まだ茫然自失している少佐の足を蹴飛ばす。
「いつまでも寝ぼけてンな。ターゲットを尾行と盗聴だ。アリスんとこに定期的に通ってるかもしれないからな」
「はっ！」
　少佐の目に生気が戻る。彼はゴーグルを下ろして立ち上がった。
「盗撮と尾行！　盗撮と尾行こそ任務！　見敵必殺！　見敵必殺！」「殺すな。行くぞ」
　二人は連れ立ってビルの隙間から出ていった。にこやかに手を振って見送るヒロさんも、足音が聞こえなくなると再び沈んだ顔になる。
「脅しのラインもやれるだけやっとかないとな」
　ヒロさんはそうつぶやく。
　紫苑寺螢一という男は、その根本的な価値観は歪んでいたけれど、思考の道筋は論理的で、損得勘定をちゃんとする人間だった。つまり、脅迫が効く。もっと重たい脅迫材料を見つければアリスを解放する

かもしれないのだ。

「幸い、っていうのも変だけど、アリスの実家は後ろ暗いところがいっぱいありそうだし、つっつけばなにかネタが出てくるかも」

「そうですね。あの病院に関しては、前に四代目が調べたことがあるらしいんで、もっと詳しく探ってくれって頼んであります」

「じゃ、おれはおふくろさんの方かな。銀座のホステスなら調べるつてがいくらかありそうだ。でも二十年以上前か……」

　ヒロさんも立ち上がり、表の路地に出ていく。しばらくして車の排気音が遠ざかっていき、僕はひとりになった。方々からの携帯メールを確認しながら、ほんとうに間に合うのだろうか、と思う。だいたいアリスの身柄をさらうだけで済む話なのか。紫苑寺螢一は言っていた。解放したところでアリスがちがう選択をするわけではない――と。

　僕は両手に顔を埋める。

　なんで死のうとしてるんだ。馬鹿じゃないのか。探偵としての本領を踏み外した？　そんなのどうだっていいだろ。生きてる以上に大事なことなんてなにひとつないはずだ。

　僕のその思考は、虚無感の中で白々しくこだました。

生きている以上に大事なことを見つけてしまった連中を、これまでたくさん見てきたからだ。それ自体は正しいことでも間違っていることでもない。幸せでも不幸でもない。人間が進化しすぎて余計なことをたくさん考えるようになった証拠に過ぎない。

　アリスはすでに決めてしまった。だから、これは僕の問題だ。僕がアリスに生きていてほしいのだ。僕の隣で笑ったり泣いたり怒ったり馬鹿にしたりしていてほしいのだ。

「……藤島くん？」

　勝手口が開いて、黒いエプロンをつけた彩夏が顔を出す。そろそろ夜の開店時間か。

「賄い食べる？」

　彩夏が手にした皿にはおにぎりが四つ載っていた。僕は首を振る。

「ごめん、あんまお腹減ってない」

「そっか」

　彩夏は僕の向かい側、古タイヤを重ねた席に腰を下ろしておにぎりを食べ始める。上目遣いでちらちらと僕を見て、三つ目を平らげてから、意を決して言ってきた。

「……あたしにできること、ないかなっ？」

　どう答えたものか迷った。

あるかないかでいえば、ない。僕自身にも現状できることがほとんどないのだ。探偵団の三人や四代目みたいにスキルやコネがあればまだしも、僕も彩夏もただの高校生だ。
　しかし、ごまかしたり言葉を濁したりはかえって酷な気がする。
「今は、ないよ」
　なるべく冷たい口調にならないようにと言ってみたけれど、全然うまくいかなかった。笑ってうなずいてくれる彩夏はほんとうにやさしい。申し訳なくなってくる。
「アリスが、戻ってきたら――」
　声がかすれてしまう。その未来をうまく思い浮かべられなくて。
「彩夏には、やってほしいことがいっぱいある。あいつ今、全然ご飯食べてないんだって。帰ってきたらいっぱい食べさせないと」
「……うん。そうだね。あと、たぶんヘアケアなんかもしてもらってないよね」
「ああ、それもそうだ。風呂には入ってるのかな」
　冗談めかして言えるくらいには心のこわばりがとれてきた。彩夏はアリスの置かれている状況をヒロさんからかなり詳しく聞いているはずだった。それでもこうして日常の中に留まっていられる強さがある。
　そう思うと、少しだけ食欲が出てきた。
「やっぱりおにぎり一個もらっていい?」

彩夏は笑って皿を僕の前に押しやってきた。

塩のきいたご飯を噛みしめながら、アリスのことを思う。彼女の《家》はいったいどこなのだろう。古い血のにおいが渦巻く紫苑寺なのか、清潔で生気のないあの病院なのか、それとも僕らが待つこのラーメン屋なのか。

＊

翌日、平坂組の事務所に朝から顔を出した。例の病院について新しいことがわかった、というメールが来たからだ。

「お疲れさんス！」「兄貴、お疲れさんス！」

鉄扉をくぐるなり一斉に最敬礼してくる黒Tシャツたちにぞんざいな会釈を返し、奥の倉庫に飛び込む。四代目は暗い部屋の中、ノートPCの画面の光を顔に受けて座っていた。

「メールじゃ書ききれないくらいのでかいネタなんですか？」と僕はベッドに腰を下ろして訊ねる。

「それもあるが」と四代目は唇の端を歪めた。「紫苑寺螢一ってやつはアリスの師匠なんだろう。こっちのメールの中身を読めても不思議じゃない。手の内は知られたくねえだろ」

「あ、ああ、そうか……そうですよね」

「テツたちにもそう回してある」

「なにからなにまですみません……」

しっかりしろ、と自分を叱る。僕が気づくべきポイントじゃないか。スキルもない上に頭も回ってないんじゃどうしようもない。

「あの病院に昔勤めてた医者を捜し出して、ちょっと脅かしたら、なかなか興味深い話が聞けた。アリスの親父――紫苑寺光紀が生まれたのも、あの病院だそうだ」

「……はあ。興味深い、ですか？　それ」

「今でこそ大病院だが、当時はボロい町医者だ。紫苑寺家のご令嬢を任せられるような病院じゃなかった」

そういえば、設備投資されて大病院に急成長したのはアリスが生まれる直前だったたって話だっけ。

「どうもあそこのオーナーは、紫苑寺光厳の若い頃からの黒い知り合いらしい。汚れ仕事を請け負わされてきたやくざ医者だ」

「ええと、じゃあ、紫苑寺光紀の出産もあんまり表沙汰にできないようなものだったってことですか」

四代目はうなずいた。

「出産当時、光紀の母親――紫苑寺照美は未婚だったらしい」

「……それは、良家の女性としてはたしかに問題ありかもしれないですね」

「それだけじゃない。光紀の父親はだれだかわかってねえんだ」

僕は目をしばたたく。話のポイントがいまいちわからない。四代目は声をぐっと低くして続けた。

「いいか、ここからは俺の推測だ。父親がだれかもわからない子供にしては、紫苑寺光紀は厚遇されすぎてると思わねえか」

「……言われてみれば……たしかに」

当主から嫡男扱いされ、養子縁組まで持ちかけられ、遺産が最終的に転がり込むように図られている。血のつながりを重視するという紫苑寺家にしては、おかしい。

僕はそこではたと気づく。血のつながり……？

自分の想像に震えた。まさか。

僕の表情のこわばりに気づいたのか、四代目がぼそりと言う。

「あくまでも推測だが、父親は紫苑寺光厳だ」

「兄妹で……ですか」

四代目の静かな光をたたえる目を見つめ返すと、まさか、という気持ちはすぐに凍りついて、あり得なくはない、という考えが浮かんでくる。そしてこれまでに知った様々なこと、それから病院で感じた紫苑寺の一族の不気味な気品を思い出すと、ほとんど確信にまで変わる。

紫苑寺の濃い血の結晶。

兄妹の間に産まれた不義の子供——それが、紫苑寺光紀。

当主の光厳は、実の息子同然に可愛がってすべてを嗣がせようとしていたという。ほんとうに実の息子だったのだとすれば、光厳のやったことにもみんな説明がつく。

「でも、……証拠はないですよね」

「脅迫に使えりゃいいんだ。かまかけて釣れればもうけもんだ。もし俺の推測があたってたとして、秘密を知ってるのが当人だけってことはないはずだ」

「そう……ですね」

曖昧に答えながら、僕は必死に考えを巡らせる。いきなり浮かび上がってきた話がショッキングすぎてうまく呑み込めない。紫苑寺光紀が、会長の光厳の実子だったとして、それでなにがどうなるんだ？

四代目が冷静な口調で言う。

「これが明るみに出ると、まず相続問題がまたややこしくなる。現状、光紀は光厳の『甥』だから、死んじまえばその娘二人には遺産は行かない。だが『息子』だと話が変わってくる」

「そうか。アリスと茉梨さんに相続権が発生するんですね」

「相続権が発生する、どころじゃねえ。その会長の弟の相続分はゼロになる。孫娘二人に全額だ。しかも光厳はまだ生きてンだろ。認知できるってことだ」

今の紫苑寺家にとっては核爆弾に等しい秘密だ。

「アリスの姉貴は光厳の看病してンだろ？　好都合だ。じじいが目を醒ましたときに認知させちまえば遺産はアリスと姉貴とで半分ずつだ」
「いや、そんなのアリスも茉梨さんも嫌がると思いますけど」
「馬鹿か。ほんとにやるわけじゃねえよ。世間に公表したらそういうことが起きるぞっつって紫苑寺の連中を脅すんだよ」
　あ、そうか。そういう話だった。
「だがな」四代目はいっそう声を抑えて言った。「これがマジネタだった場合、リスクもそうとうある。しゃれにならない金額がからむからな」
　僕は苦い唾を飲み下した。最悪、消されるかもしれない、と言っているのだ。
　そこではっと気づく。紫苑寺螢一が言っていたのはこれだ。殺された紫苑寺光紀の病室にあったという書類。それは会長の光厳との親子関係を示すなにかじゃないのか。アリスはそれを知ってしまった。遺産を総取りできるはずだった紫苑寺幹嗣にとっては、致命的な秘密。
　だから――永遠に沈黙させようとしている？
　紫苑寺光紀の存命中は、外戚になにもかもを奪われるよりはまし、とアリスにも相続させようとしていたくせに、ひとたび自分がすべてを手にできるようになると、真実を知ってしまったアリスを消そうとする。

淀んだ血と欲望が渦巻く構図に、吐き気がこみ上げてくる。
紫苑寺の狂気。
アリスを助け出すための脅迫材料としては、あまりにも危険だ。
「やる場合、脅す役は俺がやる」
「え……い、いや、四代目にそんなことさせられませんよ」
「てめえにこそさせられねえよ。かたぎだろうが」
僕はしばらく押し黙る。
この秘密はほんとうに有効なのだろうか。アリスを監禁しているのは幹嗣ではなく、螢一なのだ。あの男は祖父に入るはずの遺産とアリスの身柄とを天秤にかけたら迷わずアリスを選ぶんじゃないのか？
あるいは脅迫するまでもなく、さっさと公表してしまったらどうだろう。紫苑寺光紀は会長の光厳の実子だと、白日の下に晒してしまったら──もはやアリスだけを黙らせてもどうしようもなくなるから、匿わなきゃいけない理由もなくなる。
いや──匿う理由はなくなるかもしれないが、解放する理由にもならないか。紫苑寺螢一にはなんのダメージもないのだから。
わからなかった。不透明な部分が多すぎて方針がまとまらない。
ありがとうございます、少し考えさせてください、と言って僕は立ち上がった。

「で、どう話がついたんスか！」
「いつどこにカチ込むんスか！」
「どいつを型に嵌めるんスか！」
　四代目と一緒に倉庫を出るなり、むさくるしいゴリラたちが僕を取り囲んで口々に訊いてくるので、僕は気圧されて後ずさり、四代目に背中をぶつけてしまう。ちらと振り返ってうかがうと、おまえが処理しろ、と冷ややかに目で返される。困った。まだ方針もなにもきまっていないのに。
「あの、みんなに頼むようなことは――」
「アリス姐さんのためなら俺ら命張ります！」
　電柱が目をぎらつかせて言う。
「頭悪いから詳しいことよくわかんねえけど、なんでもやります！」
　岩男が目を血走らせて続ける。
「俺ら、姐さんにはほんと世話になってるのに、まだひとッつも恩返しできてねえんス！」
「なんでも言ってください、男見せます！」
「姐さんのためなら！」
　その場を取り繕って逃げようなんて考えていた僕は、言葉を喉に詰まらせ、二十いくつの視線のまっただ中で立ちすくんでしまう。腹の奥に熱をおぼえる。震える唇を嚙みしめ、あふれそうな感情を肺に押

し戻し、なんとか形にしてから吐き出す。

「……作戦、立ててます。そしたらみんなにも手伝ってもらいます。力、貸してください」

「──押忍!」

「押忍!」

組員たちが唱和する。

事務所を出て、自転車にまたがり、花曇りの空を見上げてからペダルを踏み込む。向かい風の中で、身体のまんなかの熱いものがいっそうはっきりと感じられる。

同じ空の下のどこかにいるはずのアリスに、僕は語りかける。

待ってる人がいっぱいいるんだ。みんなきみを大切に想っているんだよ。この街がきみの家なんだ。そうだろう?

忘れているなら、あるいは自分から忘れようとしているなら──

ぜったいに思い出させてやる。

✻

ヒロさんの調査は難航していた。まず、僕らはアリスの母親の名前を知らないのだ。アリスか茉梨さんに聞いておけばよかったと後悔しても遅い。紫苑寺螢一に電話して教えてもらうわけにもいかない（快く教えてくれるかもしれないが、こちらが嗅ぎ回っている意図がばれてしまう）。けっきょく銀座の知り合いをしらみ潰しにあたるしかなくなる。しかも、クラッキングを警戒してメールは使えないので、電話か直接出向くか、だ。

昼過ぎ、『はなまる』に戻ってきたヒロさんは憔悴しきっていた。

「徹夜明け。こんなに歩き回ったの久しぶりだよ。ぜーんぶ空振り」

ぐったりした声で言って、ペットボトルの水を飲み干す。

「ホステスやってたってのも二十何年も前の話だろ？　勤めてた店がまだ残ってるかどうかもあやしいしさ……このペースで見つかるかどうか。見つかったとして、使える情報が仕入れられるかどうかもわからないし」

「母親のラインはあきらめた方が……ってことですか」

ヒロさんは力なくうなずく。僕もうつむいて考えを整理する。

紫苑寺螢一に対して優位に立てる材料ならなんでもいいのだ。四代目のおかげでひとつは手持ちがあるけれど、心許ない。紫苑寺光紀が近親相姦の子だというのはただの推測で証拠はないし、どれほどの痛手となる秘密かもわかっていないから、『公表したいならしろ』と開き直られたら終わりだ。もっと強い

材料がほしい。病院で聞いた紫苑寺の親族会議での話からして、アリスの母親の死がそうとうきな臭いものだったのはたしかだ。深く突っ込めば紫苑寺家にとって致命傷にもなり得るかもしれない。

　でも、とにかく時間がないのだ。こうしている間にもアリスは倒れているかもしれない。

「アリスのお袋さんに直接つながる知り合いがいれば話は早いんだけどね……」

　直接つながる知り合い。紫苑寺家と、銀座の高級クラブ――

「――あ」

　僕が漏らした声に、ヒロさんが顔を上げる。

「どうしたの」

「いる……かもしれません」

　僕は携帯をポケットから引っぱり出し、番号リストを開いた。そう、たしか、銀座のクラブのママだという人がいたはずだ、どの番号だったか。

「ナルミ君の知り合いに？」とヒロさんは目を丸くする。

「吾郎先生の愛人ですよ」

　一瞬置いてヒロさんは「ああ！」という顔になる。

　茉梨さんが話していた。紫苑寺光紀は、吾郎先生に連れていってもらったクラブで、後に愛人となるその女性と出逢ったという。あのジゴロのことだ、その店の女に手を出していないわけがない。そして、僕の携

帯には最後に形見分けした十三人の愛人の番号が入っている。この中にいるかもしれないのだ。どの名前がどんな人だったのかはもちろん憶えていなかったので、片っ端から電話をかけた。胃が痛くなる作業だった。

　そうして、六人目――

「……そう、そうです。吾郎先生が甥っ子さんを連れて――えっ？　ほんとうですか、そう、はい、はい、そうですそうです！　……ええ、それで……その、ええ、そうですか、そうしていただけると」

　電話を切った僕はヒロさんに親指を立ててみせた。

「今から銀座行ってきます」

　走り出す僕の背後で、ヒロさんがため息混じりにつぶやくのが聞こえる。

「ナルミ君もうとっくにおれよりジゴロだよな……」

　僕の愛人じゃないからねっ？

　銀座の高級クラブに足を踏み入れるなんてはじめてのことだった。

　エレベーターをおりると、正面の扉の脇にガス灯を模した小さな看板が掲げられている。店の名前は『佐和』。開店前なので店内は照明が一部しか点けられておらず、大きな花瓶にもまだ一輪も活けられ

ていない。僕は一番奥の席に通され、白い革張りのソファに腰を下ろす。シャンデリアや真っ白なグランドピアノのきらめきが目に痛い。いたたまれなくてどうしても縮こまってしまう。

「藤島さん、ようこそ来てくださいました」

　ママの佐和さんは艶やかな桜色の和服が似合う五十代くらいの女性だった。よく冷えたジンジャエールのグラスを僕の前に置き、同じテーブルの九十度の位置に腰を下ろした。

「その節はお世話になりましたわ」と佐和さんが頭を下げてくるので、僕も恐縮して返礼する。形見分けのときのことを言っているのだろう。吾郎先生に荷担してだましてしまった相手なので、かなり心苦しかった。

「すみません、お店に押しかけちゃって」

「お気になさらないで。準備中の店内をお見せするなんてお恥ずかしいわ。でも、藤島さんは急いでらっしゃるようでしたし、気兼ねなくお話できる場所が他に思いつかなくて。まだスタッフも出勤していませんの、ご安心ください」

　高級クラブの経営者らしい気遣いに、僕の罪悪感はいや増す。

「なにか事情がおありなんでしょう？　吾郎さんに似て、藤島さんには危険な香りが漂っておられますもの。そういう男性を、女は放っておけないものなんですよ」

「は、はあ」

なんと答えていいかわからなかったので、僕は話を進めることにした。
「それで、紫苑寺光紀さんのこともご存じだってことですけれど」
「ええ。……藍子さんのお話ですよね」
　瀬戸藍子――というのが、茉梨さんとアリスの母親の名前だった。
「藤島さんが藍子さんについてお訊きになる事情、というのは、わたくしは知らないでいた方がいいのかしら」
　僕は申し訳なさが限界に達しかけて目を伏せる。
「ほんとにすみません。ええと、その……僕、今ちょっと紫苑寺家の人たちとトラブってまして、どうしてもその藍子さんて方のことを知っておかないといけないんです。……詳しい事情は話せなくて」
「いいんです」と佐和さんは微笑んだ。「吾郎さんのお弟子さんですもの、信用してますわ」
　弟子ではない、とか、あんな人の弟子ならますます信用しちゃだめだろう、とか色々と言いたかったが、ぐっとこらえる。
「佐和さんは藍子さんとは同じお店に勤めてたんですか」
「ええ。独立する前のことです。もう三十年も前ですね、懐かしいわ」
　佐和さんもかつてはホステスで、同じく銀座のクラブで働いていたという（その店はもうないそうだ）。
瀬戸藍子は佐和さんよりひとまわり歳下で、精神的に不安定なところがあったのでよく相談に乗ってい

たのだそうだ。
「藍子さんは、紫苑寺光紀さんとおつきあいするようになってからしばらくしてお店をやめてしまって。でも、わたくしとは友人づきあいが続いておりましたの。月に一度食事をご一緒するくらいでしたけれど。そうそう、娘さんの茉梨さんにも、小さい頃に何度かお逢いしたことがあるんです。今はもうあんなに活躍なさって……」
　佐和さんは遠い目になる。
「藍子さんも生きていらしたら、きっと喜んだと思うわ。あの方、自分のファッションブランドを持つのが夢だっていつも言ってたもの」
　その夢を、瀬戸藍子は幼い娘にも語っただろうか。不遇のうちに死んだ母の夢を背負って、マリィ・ショーンは世界に飛び出したのだろうか。
　胸が痛くなってくる。僕はこれから、死者の想い出の中に汚れた手を突っ込んで脅迫の材料を探り出さなきゃいけないのだ。
「その、光紀さん……のことは、なにか話してましたか」
「仲が悪い——とまでは言っていませんでしたけれど、光紀さんは藍子さんに逢うためというより娘さんの茉梨さんの顔が見たくてマンションに通っていらしたそうなの。それでよく愚痴を聞かされました」と佐和さんは笑う。「娘に嫉妬、なんて」

娘に嫉妬か。茉梨さんが父親について語るときのほんとうに嬉しそうな顔を思い出して、僕は複雑な気持ちになる。

「それで、光紀さんとの関係は、あちらの家にばれちゃったんですよね」

佐和さんの表情が曇る。

「奥様のいる方でしたから、しかたのないことです」

「紫苑寺家にも連れていかれたって聞いてます」

「ええ。お屋敷に呼ばれて話し合いをして、茉梨さんはあちらの家に引き取られて、名字も紫苑寺になって……。お祖父様かどなたかのご命令だったそうですね」

「その後も光紀さんは藍子さんのマンションに通ってたんですか？」

「まさか」佐和さんは心外そうな顔になる。「藍子さんは光紀さんと別れさせられました。あの頃の藍子さんはほんとうに痛ましくて、見ていられませんでした。あちらの奥様やご親族の方々に、とても厳しいことを言われたようです」

やはりそうなのか。

アリスと病院で話したときの疑問がまた頭をもたげてくる。紫苑寺家の者たちの手によって引き裂かれたはずの紫苑寺光紀と愛人が、なぜその後二人目の子供をつくり、しかも出産にあたって紫苑寺の助力を受けられたのか。

アリスはほぼ推測はついていると言っていたけれど、けっきょく答えは聞けないままだった。茉梨さんはアリスの誕生時についてどう話していたっけ？　思い返してみると、そのへんはほとんど語らずに通り過ぎてしまっていた気がする。

「茉梨さんには妹がいるんです。十歳くらい離れた」

　僕がそう言ってみると、佐和さんは目を見張った。

「……なんですって？」

「だから、僕はてっきり光紀さんとの関係はばれてからも続いてたんだと思ってたんですけど、今のお話だとちょっとちがうみたいですね。別れたふりしてこっそり逢ってたのかな」

「そんなはずは……ありませんわ」

　佐和さんは戸惑いを目に浮かべて言う。

「藍子さんは、娘にも逢わせてもらえない、とわたくしによく話していました。一度、茉梨さんが家出をして藍子さんに逢いにきたことがあったんです。そのまま泊めたところ、ご実家からの迎えがすぐにやってきて、そのときに藍子さんはだいぶきついことを言われたみたいなんです。また家出されると困るから東京から出ていけ、というようなことを」

　そこで佐和さんはハンカチを取り出して口元にあてた。

「……あんなことになったのは、そのすぐ後、だったと思います」

「……自殺……だそうですね」
佐和さんは小さくうなずき、「もっと相談してくれれば……」とつらそうに言う。
紫苑寺（しおんじ）に殺された。茉梨さんはそう言っていた。
「つらいことを思い出させてしまってすみません。でも、あの、どうしても確かめなきゃいけないんです。藍子さんが亡（な）くなったのって、何年前ですか」
「あれは……何年前だったかしら……」
佐和さんは目に光るものをためてしばらく考え込み、また口を開く。
「そう、思い出しましたわ。藍子さんが話してくれました。家出してきた茉梨さんを泊めたとき、入学したばかりの小学校の話をたくさんしてくれた、と。茉梨さん、今はおいくつだったかしら、二十六か七かしら？　二十年くらい前ということになりますわね」
頭の裏側のどこかで、みしり、と思考（しこう）が軋（きし）むのを聞いた。
おかしい。計算が合わない。
瀬戸藍子はアリスが産まれるより前に死んでいる。
茉梨さんは嘘（うそ）をついていた？　アリスも自分の出生（しゅつしょう）については嘘を教えられていたのか。
寒気（さむけ）が二の腕を這（は）い上がってくる。じゃあアリスはだれの子なんだ？
「妹さん、ほんとうに藍子さんのお子さんなのですか？」
佐和さんが訊（たず）ねてくる。僕はテーブルの端（はし）をにらんだまま首を振った。

「……そういうふうに聞いてたんですけど……でも、ちがう……みたい、ですね」
「奥様の方のお子さんなのではありませんこと？」
紫苑寺光紀の奥方、恭香の子供。
いくらか筋は通る。考えてみれば、いくら嫡男の子を妊娠しているといっても、元ホステスの愛人のために病院に最新鋭の設備投資までするのはおかしい。でも正妻のためだという話ならば納得がいく。
でも代わりにべつの疑問が増えてしまう。正妻の子なら、なぜ偽る必要があった？
茉梨さんの話を思い出す。紫苑寺光紀は紫苑寺家を嗣ぐのをいやがっていた。嫡出子ができてしまったら光厳会長と養子縁組をして後継者になるという話を断り切れなくなる。それで妻との間の子を愛人の子だと偽った？　……あり得ない。無理がありすぎる。よしんば紫苑寺光紀がそう考えていたとしても、この嘘を成り立たせるためには妻の恭香の協力も必要になる。荷担するわけがない。
そうだ、そもそも紫苑寺恭香は、夫の不貞を知ってから紫苑寺の屋敷を出て実家に戻ったと言っていた。別居していたのだから二人の間に子供ができるとは考えづらい。
やっぱりアリスは瀬戸藍子の子供じゃないのか。茉梨さんと腹違いだとは思えない。二人はあまりにも似すぎている。
「佐和さんは、藍子さんの、……その、つまり、ご遺体は、見ましたか？」
さすがに質問がえぐすぎたのだろう、佐和さんは一瞬顔を硬直させた。すぐに力を抜いて首を振る。

「いえ。報せだけです。式もありませんでした」
葬式もなかったのか。とすると。
瀬戸藍子が死んでいない――少なくともアリスが産まれるまでは――としたらどうだろう。密通を続けるために紫苑寺光紀が愛人の死を偽装したのだ。けれど子供ができてしまい、難しい妊娠だったために、隠し通すのをあきらめて紫苑寺家の力を頼った。
一見、辻褄は合っている。でもよくよく考えてみればこれも無理がある。人間ひとりを死んだように見せかけるのは――実際に僕も手を貸したことがあるからよくわかるのだが――とても手間がかかるし、相応の理由がなければやる意味がない。不倫関係を続けるためだけに死を装うなんてまるで割に合わない。しかも瀬戸藍子は自殺だ。警察が動くような死因だからまったく偽装に向かない。
わからない。なにがあったんだろう。
アリスの母親の死に関して、なにか隠蔽されている、とは確信していた。でもこれはまったく予想外だ。僕は痛んできたこめかみに親指をぐりぐりと押しつける。人や欲望や愛憎がぐしゃぐしゃにこんがらがっていて、解きほぐす糸口も見つからない。
そろそろスタッフが出勤してくる時間です、と佐和さんが申し訳なさそうに言った。
「あ、ああ、すみません」
僕は立ち上がった。目まいがして倒れそうになり、テーブルに手をつく。

「今日はありがとうございました。事情もろくに説明できないのに、色々教えてくださって」
「いいえ。お力になれたなら幸いですわ」
　クラブ『佐和』の入ったビルを出ると、もう陽が沈みかけていて、銀座マロニエ通りを行き交う人と車は店頭の明かりと街灯とで華やかに照らされていた。四月はじめの夕風はまだまだ肌寒く、僕はジャンパーの前をしめてメトロの駅の方へと歩き出す。

『はなまる』に戻ってきてみても、勝手口裏にはだれの姿もなかった。そろそろ夜の開店時間で、厨房ではミンさんと彩夏が忙しそうに仕込みをしていた。僕はなにをするあてもなく古タイヤの席に座ってしばらくぼんやりし、立ち上がって非常階段をのぼった。
　このところ、探偵事務所のドアのノブを回すとき、いつも想像してしまう。ドアを開くと寝室からきつい声と赤い空き缶が飛んできて、アリスが怒った顔でベッドから下りて、インタフォンも鳴らさない僕の非礼を詰る、そんな光景を。でも現実に部屋に入った僕を迎えるのは、冷房された虚脱感だ。だれもいない。聞こえるのは冷蔵庫のかすかなうなり声だけ。
　ベッドに腰を下ろし、頭の中でどろどろと渦を巻いているものが冷えて固まって沈殿していくのを待つ。
　収穫は――あったといえるのだろうか。

新しい事実は明らかになった。紫苑寺の連中が寄ってたかって隠していた事実だ。アリスの誕生と、母親の死の齟齬。真相も、隠した意図もまだわからない。しかも隠していた人たちの中に茉梨さんも含まれているのだ。あるいは茉梨さんも母親について嘘を教えられていたのだろうか？　僕は彼女との会話を思い出そうとする。記憶が混濁していて、さっきまで話していた佐和さんの声や、病院で最後に交わしたアリスとの言葉ばかりがよみがえってくる。

真相が見通せないままでもいいから、知り得たものを紫苑寺螢一にぶつけてみようか。すべて知っているようにはったりをきかせて、手札を小出しにして。こちらが致命的な爆弾を抱えていると思わせられればいいのだ。真実を握っている必要はない。

でも、相手はあの紫苑寺螢一だぞ？　こっちより確実に手札が多いんだ。どうやったって見抜かれるんじゃないのか。

だめだ。頭ぐちゃぐちゃだ。一眠りするべきか。あちこち歩き回って身体が重たいし。

でも、手をこまねいている間にもアリスのいのちが削れていくのかと思うと、とても眠りに身を任せられない。くたびれはてているのに、目を閉じるのが怖い。

ベッドに仰向けに転がる。

いつも探偵が身を据えていた場所。探偵だけが見ていた景色を、僕は逆さまに眺める。

アリス、きみはどうしてあんなことをした？　教えてくれよ。紫苑寺螢一が言っていたようにネットにアクセスできる環境が手元にあるなら、あの男のくそったれな防壁なんて全知無能のその指先でびりびりに引き裂いてウェブの海に泳ぎ出して、僕の電話を鳴らしてくれ。きみと話したい。声が聞きたい。顔が見たい。……逢いたい。

ふと、僕は目を上げる。

色気のないスティールラックの、ぎっしり詰め込まれた様々な機器の隙間に、水色のものが見えた。

本の背表紙だ。

立ち上がり、顔を寄せる。今までまったく気づかなかった。アリスがいなくなり、彼女がいつも座っていたこの場所にはじめて身を置いた今、やっと気づいた。ラックの奥に何冊かの文庫本が押し込んであるのだ。

引っぱり出す。ハヤカワSFだ。

『故郷から一〇〇〇〇光年』

『愛はさだめ、さだめは死』

『たったひとつの冴えたやりかた』……

どれもジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの作品だった。

父親にもらった本だろうか。だいぶ古く、小口はコーヒーに浸けたみたいに変色している。ぱらぱらとめくってみると、『たったひとつの冴えたやりかた』の最後の方の一ページが破りとられているのを見つける。

あとがきの頭だ。ぬいぐるみのリボンに隠されていた、僕宛のメッセージの最後のピース。目にしたときの痛みがまたよみがえってきて、僕は冷たいシーツに身を横たえ、本を胸に置く。

全部読めば、アリスの気持ちも少しはわかるだろうか。

べつの一冊を手にとってみるが、小説に意識を向ける気力はどうやっても涌いてこなかった。そんな気分じゃない。あとがきだけをなんとなく眺める。

四冊目、『星ぼしの荒野から』の訳者あとがきを読み通したとき、なにかが僕の中に引っかかった。違和感の正体がわからず、もう一度読んでみる。ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアことアリス・シェルドンの来歴や、各短編の解説だ。今の僕にとって意味のある記述なんて出てくるはずもなかった。それなのに、僕は三度ページをめくり直した。

ようやく気づき、本を閉じて身を起こす。

すべてがつながる。

なにもかもが透き通って澄み渡り、地平に煌々と燃え、僕の目を灼く。やりきれなさと切なさが僕の胸に押し寄せてくる。

それで——なのか。

それで、彼女は選んだ。あの、たったひとつの冴えたやりかたを。

他にどうしようもなかったのだと、今ならわかる。そして僕もまたどうしようもない。両腕いっぱいに抱えた血まみれの真実はみんな、土に埋めるしかない。脅迫の材料になるならなんでも掘り出してやろう

なんて考えていたほんの数時間前までの自分が心底恥ずかしい。

アリス。きみが探偵をするたびにいつも噛みしめていた真実の冷たさを、僕はきみの座っていたこの場所で今さら味わっているよ。墓をひとつ暴くたび、死者の代わりにきみが血を流していたんだね。その痛みを数パーセントでいいから僕にも負わせてほしいなんて、よく言えたものだ。ほんとうに僕は無知で傲慢だった。こんなの、人に分け与えられるものじゃない。ただ膝を抱えて縮こまって震えて耐えるしかない。

吹き下ろす冷たい風の中、僕は両手を見つめ、かじかんだ指を開き、握り、また開く。

じゃあ、どうする？

頭蓋骨の中で思考がこだまする。どうする？　どうする？　どうする……？

答えはわかりきっていた。けっきょく僕は探偵にはなれないのだ。詐欺師にしかなれない。事実に泥と漆喰を塗りたくって焼きごてをあてて金粉をまぶして真実を塑造する、それしかできない。

やってやる。

ベッドを飛び降り、部屋を出た。ドアに鍵をかけ、ふと目を上げると、ファンシーな字体が打たれたプレートが目に入る。

NEET探偵事務所

It's the only NEET thing to do.

これがたったひとつの冴えたやりかた。（It's the only NEET thing to do.）

そうなのか？

もちろんそうだ。僕はたったひとつの僕の人生しか生きることができないのだから。

非常階段を下りていくと、勝手口前に集まった四人の頭が見える。僕の足音に気づいたのか、一人また一人と顔を上げる。日に焼けたテツ先輩の精悍な顔。ゴーグルの下に狡猾さと幼さを押し隠した少佐の顔。疲れてはいても甘い笑みを絶やさないヒロさんの顔。それから、狼の獰猛さと商売人の計算高さを兼ね備えた四代目の顔。

「アリスの居場所、だいたいつかめた」

テツ先輩が言った。僕は四代目とヒロさんの間の席に腰を下ろす。

「やっぱりあいつのオフィスだ。アスタ・タタリクス社の入ってるビル。昨日、医者が入っていくのを少佐が確認してる。まだ一日だけだから確定じゃねえんだが、不動産屋の情報で、三日前に大荷物が運び込まれてて、そのうちのひとつはどう見てもクイーン・サイズのベッドだったって話だから、かなり固い」

四人はうなずきあい、僕にちらと目を向けてくる。少佐が引き取って先を続けた。

「ただ、何階かがまだわかってません。他の会社も入ってるビルなんで、あっちとしても強面を大勢置いとけるわけじゃない。平坂組を総動員して一気に全フロア捜せば見つかるかもしれませんが」

「うちのもん総出で突っ込んだってロックがかかってたらどうしようもねえだろう」と四代目が言う。僕はアスタ・タタリクス社の社長室の厳重なロックを思い出す。あのレベルのセキュリティがアリスの閉じ込められている場所にも施されていたら、いくら人数を頼んでもまったくお手上げだ。
「どうする。それなりの追加報酬を出すなら――」四代目は声をひそめた。「やりたくはねえが、一番胸糞悪い手段に出てもいい」
「そうだ」
「紫苑寺螢一の身柄さらって痛めつけて――ってことか」とテツ先輩が低い声でうめく。
「だめだよ」とヒロさん。「その後どうすんだよ。金も権力も持ってる連中が相手なんだよ、おれら全員ムショにぶちこまれてアリスもまた連れ戻されておしまいだよ」
「ムショに食らい込む役をうちの組でかぶるって言ってンだ」
「だめだってば。四代目はほんと考え方がやくざだよなあ」
「もちろん弱み握って今後も手出しできないようにするのがベストなのはわかってる。やつのオフィスに押し入ってなにかネタ漁るのはできないのか。アリスを監禁してる証拠とかがもし出てくれれば使える」
　テツ先輩は首を振った。
「それができるんならとっくにアリスを連れ出せてるよ。あのビルはどこのフロアもちょっとセキュリティが最新鋭でガチガチすぎて手出しできねえよ。アリスがいりゃあオンラインでなにかしらできるかもしれんが……」

「ヒロはなにかネタつかめなかったのか」
　四代目に言われ、ヒロさんは覇気（はき）なく首を振った。
「なんもなし。おれ今回ぜんぜんだめだわ。ナルミ君は？　銀座（ぎんざ）行ってきたんだろ。なにか脅（おど）せるネタ見つかった？」
「え、ええ」
　僕は言いよどみ、舌（した）で唇（くちびる）を湿（しめ）らせる。視線が集まるのを感じる。
　これは僕の事件なんだな、とあらためて思う。依頼人（いらいにん）は僕で、請けたのも探偵代理（たんていだいり）の僕。僕が、大切な人を喪（うしな）いかけている、ごく単純な事件。
　だから、僕が決める。
「ネタは見つかりませんでした。でも、方針はもう固まってます。脅迫（きょうはく）はなしです。今回も、いつもみたいに——」
　それでもその一言（ひとこと）は、少しだけためらう。
「詐欺（さぎ）でいきます」
　四人の目つきが一斉（いっせい）に変わる。気温が急変したかのようだ。肌（はだ）に触れる風はぴりぴりと冷たいのに、皮膚（ひふ）一枚隔（へだ）てた下には抑えきれない熱が脈（みゃく）打っている。
「テツ先輩は——」

「おう」
「けっきょく、最後は組員といっしょに突っ込んでもらって力尽く、ってことになると思いますから、ビルの見取り図と、アリスのいる場所の目星、ルート選定をお願いします」
「わかってる。もうやってるよ」と先輩は笑って、見取り図らしき紙を取り出してひらひらさせる。さすがだ。
「少佐」
「なにをすればいい」
「エレベーター、詳しいですか？　いじれます？」
　ゴーグルの下の幼い目がしばたたかれる。
「エレベーター？　まあ、この世に存在する機械はすべて造作もなくいじれるが」
「わかりました。後で詳しく詰めます。ヒロさん」
「なんでもやるよ」
　憔悴しきっていたヒロさんも顔を生気で紅潮させている。
「一人、落としてほしい女性がいるんです。その、明日じゅうに」
「今夜やる」
　ここまでは気軽に頼めた。でも最後のはさすがに緊張する。

「四代目……」
「なんだ」
横目が僕の頬を刺す。
「お金、貸してください」
顔色ひとつ変えなかったのは当の四代目だけで、テツ先輩も少佐もヒロさんもぎょっとした顔になる。
「いくらだ」
「必要なものまとめてみないとわかりませんけど、たぶん千万単位になるんじゃないかと」
他の三人が唖然とするくらいの大金だった。もっとあれこれ突っ込まれるかと思っていた。でも我が義兄は即答した。
「年利30にまけといてやる。絶対にアリスに払わせろよ」
「――は、はい！」

その夜のうちに新宿に自転車を走らせた。御苑のそばの交差点に面して建つ七階建ての細いビルだ。どのフロアもまだ煌々と明かりがともり、ZODIACという社名ロゴが浮かび上がっている。
またここに来る羽目になるとは思ってなかったな、と僕は歩道からビルを見上げる。

ミンさんの結婚騒動、『はなまる』閉店危機、そして香港マフィアとの衝突。あれは——去年の十一月か。二人乗りしたときのアリスの腕の感触を思い出すとつい先月くらいの気もするし、息をついて春の夜の和らいだ風に意識を向けるとはるか昔のような気もしてくる。

受付の電話で呼ぶと、しばらくしてエレベーターホールの方からパンツスーツ姿の長身の女性がやってくる。色気なくさっぱりと刈り込んだ髪に、険しい目つき。黄小鈴——ミンさんの従妹であり、香港マフィア首領の孫娘でもあり、またこのゾディアックというIT企業の経営者でもある、たいへん怖い女性だ。

「まさかまたあなたに逢うとは思ってなかった」

エレベーターに一緒に乗り込むと小鈴さんはため息混じりに言った。僕もですよ、と言いそうになり、慌てて言葉を飲み込んで社交辞令を吐き出す。

「すみません、お忙しいところを、こんなに遅くに」

「どうせろくでもない相談なんでしょうけど」

六階の小鈴さんの部屋に通される。こざっぱりした広いオフィスで、スティールラックのあちこちに花の鉢や人形が飾ってあり、女性らしさも感じられて落ち着く部屋だった。すすめられたソファに腰を下ろすと、お茶もちゃんと出してくれる。

「あなたには借りがあると言えなくもないから、一応話だけは聞くけれど、頼みって？」

そういう言い方をされると切り出しづらくなってしまう。

「一つ目は、これです」
　プリントアウトとUSBメモリを手渡す。一読した小鈴（シャオリン）さんの眉（まゆ）が寄る。
「その記事を、ゾディアックのニュースサイトで流してほしいんです。こちらの指定したタイミングで」
「ガセネタでしょう、これ」
「いえ。発表するそのときには現実になってるんです」
　疑わしげな目が僕の手元あたりをまさぐる。やがて小鈴（シャオリン）さんは息をついた。
「一つ目ってことはまだあるの？」
「はい、もう一つ。東新宿（ひがししんじゅく）駅直結のオフィスビル、ありますよね。あそこにゾディアックの子会社が入ってますよね？」
　小鈴（シャオリン）さんは首を傾げる。
「それがどうしたの？」
「場所と、それから人手も貸してほしいんです」
　しばらく、鋭い視線が僕の顔を斬（き）り刻んだ。やがて小鈴（シャオリン）さんは口を開く。
「あの探偵（たんてい）の子が実家（じっか）となにかあったの？」
「……あー、アスタ・タタリクスの経営者のこと、知ってましたか」
「当たり前でしょう。同業だからチェックくらいしてる」

それもそうだ。同じビルにオフィスを構えているとなればなおさらだ。

「アリスと紫苑寺（しおんじ）の家が、少々揉（も）めてまして、その、詳しい事情はお話しできないというか、小鈴（シャオリン）さんの安全のためにも知らないでいた方がいいかなって」

「そういうこと続けてるとあなたもまともな社会に戻れなくなると思う」

細長いため息が彼女の唇（くちびる）から吐き出された。

「ご忠告（ちゅうこく）痛み入ります……」

すでに重々（じゅうじゅう）自覚はあった。

「でも、アリスの命がかかってるんです。時間もあんまりなくて、他に頼れるところもなくて。人手（ひとで）もかなり必要なんですけど平坂組（ひらさかぐみ）の連中（れんちゅう）を動かすと目立っちゃって向こうに策がばれるかもしれないし、だから、そのっ、お願いします。お金は払いますから」

小鈴（シャオリン）さんはあきらめたように首を振った。

「あっちの会社はわたしの管理下（かんりか）じゃない」

「……え？」

「紅雷（ホンレイ）の会社なの。だからあなたが紅雷（ホンレイ）に頼みなさい。わたしからも言っておくから」

「えええええええ」

思わず妙な声を漏らしてしまう。黄紅雷。この小鈴さんの兄であり、香港マフィアの跡取りで、僕がこれまで逢ってきた中で暴力的という意味では間違いなくいちばん危険な男だった。その黄紅雷に頼みにいけ、だって？

いや、その可能性をまったく考えなかったわけではない。というか、黄紅雷に接触した方が話は早いだろうなと思いつつも、なにをされるかわかったものではないので恐怖心から小鈴さんに連絡をとったのだ。小鈴さんなら少なくともいきなり殴ったりナイフを口の中に突っ込んできたりはしない。

「男手が内密にたくさん必要というのなら、なおさら紅雷に頼むべきでしょう」

「それは……はい、そうですよね……」

「あなたもほんとに変な人。大勢巻き込んでリスク背負わせて下手すれば死人も出るようなことは平気で企むくせに、紅雷に頭下げにいくのは怖がるわけ？」

「……たぶん大事なとこの想像力欠けてるんですよ」

僕は頭を掻いた。

「でしょうね」

小鈴さんは携帯電話を取り上げた。黄紅雷を呼び出しているのだろう。

「大事は恐れないくせに小事にびくつく。マフィアの頭領に向いてるんじゃない？」

冗談でもやめてほしかった。

帰宅したときにはもう日付が変わっていた。真っ暗な階段をのぼり、自室に入って明かりもつけずにベッドに身を投げ出す。

疲れた。腕も脚も雑巾みたいにみじめに萎えきっていた。黄紅雷に頼み事をしたり、あまつさえ値段交渉までするなんて、もう金輪際ごめんだった。よく引き受けてもらえたものだ。彼の「おまえに貸しをつくっておくのも悪くない」というせりふが耳にこびりついて落ちない。最悪の相手に弱みを握られてしまった気がする。

いや、今さら悔やんでもしょうがない。僕にできるすべてをやりつくすんだ。

力の入らない腕をなんとか突っ張って、身体をベッドから引きはがす。部屋の明かりをつけて机のPCに向かった。

もう走り出してしまった。金も人もありったけ借りて、全部賭けてしまった。後戻りはできない。ここから先は僕の記憶力が勝負だ。脳細胞一粒残らず絞り出すんだ。

ふと、僕は紫苑寺螢一の言葉を思い出し、CDラックを探ってMr.BIGのアルバムを引っぱり出した。80年代の西海岸のナイーヴなハードロックが、いちばん作業が捗ると。

よろしい、試してみよう。ディスクをデッキに押し込み、ヴォリュームを絞って、再生ボタンを押す。犬の吠え声、そして激烈な上昇音と下降音から始まるギターとベースの身を削り合うデッドヒート。

『コロラド・ブルドッグ』。

アリスにつながる歌。

まだつながっているはずだ。そう信じて、たぐり寄せるしかない。

少佐の最も危険な任務は、作戦決行の前日だった。面が割れている僕が敵地をうろちょろして勘づかれても困るので、『はなまる』で帰還を待っていることしかできなかった。

夕方、ベージュ色のつなぎの作業服という珍しいかっこうで少佐は意気揚々と戻ってきた。

「楽勝楽勝！　自分には二十五秒でも長すぎるくらいだったな。録画チェックしてくれ」

「いま再生します」

僕は少佐から受け取ったSDカードをタブレット端末に挿して動画を再生する。

例のアスタ・タタリクス社が入っているオフィスビルの、エレベーターの防犯カメラ映像だ。ホールのモニタに表示されているものをデジカメで撮影してもらったものなので画質は絶望的に粗いが、エレベーター内でなにが起きているのかはわかる。

一階でドアが開き、運送業者の男性が、身長よりも大きな荷物をカートに積んでエレベーターに入ってくる。ドアが閉まり、上昇が始まる。十二階に着くまで、およそ二十五秒。ドアが開き、業者と大荷物が出ていく。

別れは二日後だった。

　学校帰りに事務所に顔を出したときから、もうその予感はあった。驚くべきことにアリスが自分でベッドの上を片づけていたからだ。

「手伝ってくれたまえ！　うう、ぼくの友人たちをこんな狭苦しい箱にぎゅう詰めにするのは心苦しいのだけれど……」

　アリスは半泣きになりながらも、百を超えるぬいぐるみを段ボール箱に押し込んでいた。手伝えといわれたら手伝うしかないのだが、僕の詰め方がいちいち気に食わないらしく、「イルカの背びれが曲がってるじゃないか！」「そんなに平たくしたらカピバラさんとこげぱんの区別がつかなくなってしまうだろうっ」「お猿と犬を同じ箱にしないでくれたまえ、仲が悪いんだから！」と文句ばかりが飛んできた。

　作業が完了したのは一時間後だった。段ボール箱は台所を完全にふさぐほどに積み上げられ、僕とアリスは疲労困憊してベッドに並んで寝転がった。なにもない真っ白な寝床を見渡し、こんなにでかいベッドだったんだな、と新鮮な気持ちになる。

「ぬいぐるみ、どうするの？」

アリスを見やって訊ねる。埃っぽい隅っこのぬいぐるみも片づけたせいか、彼女のパジャマの袖は少し黒ずんでいた。彼女は天井をにらんでしばらく考えた。長い黒髪がシーツの上にこぼした蜜みたいに広がっていた。

「螢にいさまに預かってもらうかな。この先赴くのが、友人たちと一緒にいられる場所とは限らないからね」

その言葉で、僕の胸の内側にようやくこらえきれない熱が生まれる。いや、とっくにそこで溶け出していたのに、今まで気づかないふりをしていただけかもしれない。

アリスは手を伸ばし、ラックの機器の間から手のひら大の四角いものを引っぱり出した。

リモコンだ。

彼女の指がボタンに触れる。この探偵事務所を片時も休むことなく満たしていたエアコンの稼働音が、どこかの深みに吸い込まれるようにして消える。

死んでしまった。終わってしまった。僕はもうその感慨を押しとどめておけなくなる。

アリスが顔を横に向けた。僕も彼女の視線をたどって、ベッド脇モニタの、六分割された防犯カメラ映像を見やる。『ラーメンはなまる』前の路上に二台の車が駐まっている。そのうちの片方は白と黒に塗り分けられ、赤色灯を戴いている。

トレンチコート姿の男たちが車から降りてくる。店から出てきたミンさんと、なにか話しているところも映っている。

「……姉様が、昨日、自首したそうだよ」

アリスが天井に向かって小声で言った。

僕も天井に向かってうなずいた。

「これまで、この国の法律など洟も引っかけないでいたぼくが、こんな形でけじめをつけるなんて、笑える話だね。……でも、他にどうしようもないからね」

冷房の風の音がない今、アリスの言葉はなんのフィルタもなく、残酷に僕の胸に届く。

「ねえ、アリス」

「なんだい」

「ものすごく情けないこと言っていいかな」

「きみが情けないことを言ったためしがあったのかい？」

笑えなかった。その通りかもしれない。

「アリスがいなくなるなんていやだよ」

「ばか」

それは、これまで探偵が口にした中で、いちばんやさしい罵倒の言葉だった。

「きみが暴いた罪なんだ。代理であっても、きみが探偵した事件なんだ。その痛みはきみが抱えていくしかないんだよ。ぼくだって何度もそうしてきたんだ」

　答えようとするけれど言葉にならない。アリスの声はいっそう淡く空気に溶ける。

「もっとも、ぼくは──少しは楽をさせてもらったけれどね。ちょっとだけ肩代わりしてくれる助手が、そばにいたからね」

　そんなことを今言うなよ。顔も見られなくなるじゃないか。

「ナルミ。すべて知っていて、最初からやり直せるとして、きみはちがう道を選ぶかい？」

　問われ、僕は両手を持ち上げ、青白い蛍光灯の光にかざして確かめる。

「いや」

　自分でも意外なくらいはっきりとした声が出た。

「同じことをしていたよ」

「うん。……ぼくだってそうだ」

　僕は身を起こし、ベッドを下りるのだけれど、脚に力が入らず、まだ冷たさの残る床にへたり込んでしまう。アリスが寄ってきてベッドの端に腰掛けるのだけれど、意気地無しの僕は顔を上げられない。

「ねえ、アリス。これまで色んなことがあったけど」

　僕は目の前の彼女の膝のあたりをじっと見つめながら言った。

「今までのことは全部、最初からどこかに書いてあって、僕はただその通りに毎日毎日やってきただけのような気がするよ」

　きっとアリスは今、あのあたたかくて儚げな笑顔をつくっているのだろう、と思う。やがて少女の柔らかな声が降ってくる。

「そうだね。でもそれはきみの勇気、きみの足跡、きみの失敗、きみの物語だ。自分で選んだのか石版に刻まれていたのかなんて、どうでもいいじゃないか。きみは今こうしてぼくの前にいる。ぼくはそれを嬉しく思う。きみはどうだい」

　僕はアリスの顔を見上げようとして、不意に涙がこぼれそうになり、顔を持ち上げられなくなる。

「それで、きみはこれからどうする?」

　僕は——これからどうする?

　それはもう、決めていた。

　自分にできる、たったひとつのやりかた。

「僕の物語を書くよ」

　震えそうな声で答えた。

「どこか遠い昔で僕がそれを読んだときに迷わないように、これまでのことをみんな書き留めておくことにする」

　それから、アリスを忘れないように。

僕の目の前に小さな手のひらが差し出された。

　ようやく顔を上げることができた。僕だけ泣いているのは不公平な気がしたけれど、アリスの手を握り返した。

「では、探偵(たんてい)から作家にプレゼントだ」

　アリスは笑う。

「題名を決めてあげよう。『神様(かみさま)のメモ帳(ちょう)』というんだ。ぴったりのタイトルだろう？」

　つまり、あなたがいま手にしているこの本である。

物語が終わっても、あらゆる人の生は続いていくわけだから、神様のメモ帳にももちろん後日談が書いてある。

少佐はゲーム制作会社を起ち上げて、えらく濃いガンシューティングをいくつもリリースしてごく一部に熱狂的な好評を博している。本人はいつも楽しそうに忙殺されているのだけれど、僕が取材を申し込むと快諾してくれて、オフィスを訪れたときには資料用とかいって本物の銃のコレクションを嬉しそうに見せてくれた（持っていていいの？）。

四代目も新しい会社をいくつか興した。いちばん成功したのは服の通販会社。ファッションの地方格差を利用したとかどうとかで、色んな雑誌にインタビュー記事が載っているのを見かけた。でも相変わらず、『ラーメンはなまる』にやってきては、テツ先輩たちと飲んで馬鹿騒ぎをしている。

あとがき

この巻の最後の二つの章は、四年前に書いたものです。
ファイルのプロパティには最終更新日時という便利な値がありますから、簡単に確認できます。『神様のメモ帳Ⅹ』と題されたわずか原稿用紙二十枚ほどの分量のファイルは、２０１０年が最後の更新です。
たしか、五巻の短編集の発売に合わせてインタビューを受けたとき、このシリーズの終わりについて質問され、そのときに自分でもはじめて完結を意識したのでした。何巻になるのかはわからないけれど、おそらくアリス自身の話を書いたらそれが最終巻になるでしょう、と僕は答えました。帰宅してから自分の発言について少し考え、やはりその通りだろうなとうなずき、それではいったいどんなエンディングになるのだろうか……とぼんやりキーボードを叩いてできあがったのが、あなたが今し方読み終えたであろう最後の二つの章です（あとがきから先に読む派の方にはよくわからない話になって申し訳ありません）。
四年前にすでに書いていた文章を、ほぼそのまま使っています。この結末につなげるために、この巻の物語を後から創ったわけです。と書くとなにやら難しいことを成し遂げたみたいに見えてしまいますが、どういう話でも収まるような結末なのでべつに自慢できることではありません。

一箇所だけ、変更しました。最終章でナルミが使っている携帯電話を「スマートフォン」とはっきり表記したのです。この『神様のメモ帳』シリーズは、初巻を書いた年つまり２００６年を舞台年代として想定しています。アップルがｉＰｈｏｎｅを華々しく世に送り出して情報社会のすべてを塗り替えてしまうその前年です。スマートフォンはまだまったく普及していませんでした。現代物を長い期間にわたって書き続けていると、たいがいこの問題にぶつかります。現実の社会が進化して作品とかけ離れてしまうわけです。

解決策は三つあります。

一つ目は、作中の時間もさっさと現実に合わせて進めてしまうことですが、これは物語進行に多大な支障を来すことが多いので、どんな場合でも選べる手段ではありません。

二つ目は、しれっとした顔でとくに辻褄合わせもせずに現実と作中のテクノロジーや風俗を一致させてしまうことです。

三つ目は、乖離を受け入れてそのまま書くことで、僕が選んだのもこれでした。情報技術の最先端を行く天才クラッカーが登場する話なのに、探偵団のメンバーたちがいまだにガラパゴスな携帯電話をぽちぽちやって連絡を取り合っている——というのは書いていてどうにも複雑な気持ちでしたが、しかたありません。

最終章の「携帯電話」という箇所を「スマートフォン」に書き換えたとき、やっと追いつけたんだな、と安堵したことを憶えています。

そんなわけで、やっと追いつけました。三年ぶりの『神様のメモ帳』をお送りします。大変長らくお待たせしてしまって申し訳ございません。その間なにをやっていたのかというと、ご存じの方はご存じの通り、べつのシリーズを色々と書いていました。

この『神様のメモ帳』はほぼ僕の作家生活と同じだけの年月書き続けてきたシリーズなので、文中でナルミが「アリスと出逢ってからまだ一年半なのか……」と感慨にふけるたびに自分でも「まだ一年半なのかぁあああ……」と十倍くらい深く感慨にふけっていました。傍から見ていたらずいぶん気持ち悪かったと思います。

五巻を出すときに、作中で起きた事件の時系列を確認するために作成した表がありますので、今ここで完成させてみたいと思います。

高校1年　10月　エンジェル・フィックス事件（1巻）
高校1年　3月　二億円ロンダリング事件（2巻）
高校2年　4月　さらし盗難事件（5巻1話）
高校2年　5月　酒屋異物混入事件（5巻2話）
高校2年　5月　園芸部廃部危機（3巻）

高校２年　７月　平坂組抗争（４巻）
高校２年　８月　風俗嬢誘拐事件（５巻３話）
高校２年　９月　野球対決（５巻４話）
高校２年　10月　ミンさん結婚騒動（６巻本編）
高校２年　11月　吾郎先生来訪（６巻短編）
高校２年　12月　ホームレス襲撃事件（７巻）
高校２年　１月　雀荘荒らし事件（８巻１話）
高校２年　１月　援助交際暴行事件（８巻２話）
高校２年　２月　続エンジェル・フィックス事件（８巻３〜４話）
高校２年　３月　紫苑寺家遺産騒動（９巻）

……長い一年半でした。ナルミにとっても、僕にとっても。べつにあとがきのページを稼ごうと思ってこんな表を載せたわけではありません。これを機に前の巻も読み返していただけたり、あるいはもう一冊ずつ買っていただけたりしたら幸いです。

思えばこの小説の初巻は、まったくプロットのアイディアもないままひたすらキャラクター表に面白そうな連中を並べた後で、「女子高生が屋上から飛び降りる」という事件の発端だけをまず決め、そこから泥縄式に創っていったものでした。なぜ飛び降りたのか、という自問に対して、もし「麻薬」とはべつの答えを出していたとしたら、都心を舞台に『池袋ウエストゲートパーク』を下敷きにしよう、という案も出てこなかっただろうと思います。僻地の村を舞台にした横溝正史風の怪奇探偵小説だとか、地方都市で繰り広げられるスティーヴン・キング風のサスペンス・ホラーだとか、超巨大学園を股に掛けたラブコメ・ミステリだとかになっていた可能性もあるわけです。ちなみに三つ目のは実際に書きました（他の出版社で）。

　歩き出す前は目の前に広がる無限の可能性に途方に暮れていたのに、最後まで書き上げてしまった今、こう書くしかなかった、むしろ大昔にどこかのだれかがメモ帳に記したものをそのまま書き写してきただけだった——という想いしか抱けないのですから、小説家というのは不思議な仕事です。どの作品もそうなのです。8巻のあとがきの繰り返しになりますが、僕が書いているのではなく、物語の方に書かされていると感じるのです。よく作家が口にする「キャラが自分で勝手に動く」という現象も、要するにこれです。気をつけなければいけないのは、キャラが勝手に動いたように思えるのは完成後に振り返ってみたときだけだということです。創っている最中は作者がじたばた苦しんで動かし方を考えているのに、脱稿するとなぜかその苦しみをするっと忘れてしまうのです。たぶん次の作品を書くためでしょう。女性は出産時

の痛みを産後は思い出せなくなる、そうでなければ次の子を産めないから――という説がありますが、似たようなものかもしれません。

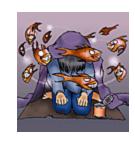
　そんなわけで僕もナルミやアリスに別れを告げ、彼らを産み出した苦しみもするっと忘れ、次の原稿に進むときが来てしまいました。

　本シリーズを書き上げるにあたって、ほんとうにたくさんの方々のご協力をいただきました。まずは最初から最後まで支えてくれた担当編集の湯浅さまと、素晴らしいイラストの数々で登場人物に魂を吹き込んでくれた岸田メルさま。漫画版を担当し、現在は別作品で新しいパートナーとなったT-iVさま、並びに電撃大王の編集の方々。そしてTVアニメでシリーズをおおいに盛り立ててくださったスタッフとキャストのみなさま。ともに初主演でういういしかったナルミ＆アリス役のお二人がその後大活躍しているのを見ると、べつに一ミリたりとも僕の功績ではないのですが大変誇らしく思えます。最後に、だれよりもなによりも、読んでくださったあなたに。この場を借りて無上の感謝を捧げたいと思います。とても幸せな作品になりました。ほんとうにありがとうございました。

二〇一四年五月　杉井 光

杉井（すぎい） 光（ひかる）

1978年、東京生まれ。完結にあたって、第一巻を書いていた頃のことを思い出そうとするが、引っ越しも併行執筆シリーズも多すぎてよく思い出せない。深夜のモスバーガーで書いていたような……。

イラスト／岸田（きしだ）メル

1983生まれ、イラストレーター。主な仕事に、ライトノベルの挿絵や、ゲーム、アニメのキャラクターデザインなど。趣味はネット通販です！　引きこもってます！

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
電撃文庫編集部
「杉井 光先生」係
「岸田メル先生」係

本書は書き下ろしです。